

「ぬけがら」

佃典彦

キャスト

- ・ 男1 (鈴木卓也)
- ・ 父1 (鈴木卓二郎八十二歳)
- ・ 父2 (鈴木卓二郎六十歳)
- ・ 父3 (鈴木卓二郎五十歳)
- ・ 父4 (鈴木卓二郎四十歳)
- ・ 父5 (鈴木卓二郎三十歳)
- ・ 父6 (鈴木卓二郎二十歳)
- ・ 女1 (鈴木美津子、男の妻)
- ・ 女2 (田中久恵、葬儀屋の女)
- ・ 女3 (鈴木景子、若かりし頃の男の母)
- ・ 女4 (佐藤理沙、男の浮気相手)

県営住宅3棟の114号室。

6畳間が二つの2DK。

#1 ある夕暮れのこと

部屋のアチコチに男が倒れている。

ベランダの窓から差し込む夕日が男達を照らしている。

服を着ている者、半裸の男、ステテコ姿の者・・・ある者は壁に寄りかかり、ある者は押し入れの前、ある者はその辺に適当に・・・まるで野垂れ死にしたように転がっている。

その数5人・・・やがて・・・「ピンポン」と玄関のチャイム。

5人・・・。

二度目のチャイム・・・やがて、ゆっくりドアが開いて女が一人入ってくる。

女1・・・。

女1は部屋の中を見渡すとバックから消臭スプレーを出して部屋中に撒きちらし・・・さらに飽き足りないのか直接男達にも噴射。

5人・・・。

反応がないところを見るとやっぱり死んでいるのか。

女1 殺人現場・・・。

部屋の中は敷きっぱなしの布団、男の一人暮らしの風散らかり具合の中、なぜか転がっているウクレレ・・・。

女1、携帯電話が・・・だが、部屋の隅で着信音。

女1 (舌打ち)

電話を切ると観念したかの様に待ちの態勢。
しばらく・・・。

と、ドアが勢いよく開いてジャージ姿の男が入ってくる。

男 ハアハアハア・・・(肩で息)

女1 なに、ジョギング？

男 ハアハアハア・・・(話しかけるな)

女1 へえ、あなたでも運動することあるんだ。

男 スウ・・・ハア・・・(深呼吸)

女1 いつまで出しっぱなしにしとく気なの・・・お父さん。

男、冷蔵庫から生卵五個、牛乳、かき混ぜて一気飲み。

男 ングエっ・・・フウー・・・。

女1・・・(啞然と見つめる)

男 なに。

女1 や・・・別に・・・どこ。

男 祭壇。

白木の祭壇に「父」「母」の遺影が並んでいる。

その前に離婚届・・・。

女1 ・・・・押してないじゃない。

男 大丈夫、大丈夫。

男、洗濯機を開けると中からまた一人ピヨコンと頭が飛び出した・・・
これで6人。

女1 ちょっと・・・。

男 うへえ、忘れてた・・・あんまり臭うんで一昨日洗ったんだ、こいつ・・・

ああ、タオルと体が絡んじまったらあ・・・(におい嗅いで)ちえつ、
洗い直しだな。

男、シャツを脱ぐと洗濯機に投げ込み、山になってる洗濯物から
タオルを引っ張り出して汗を拭く。

女1 なんか・・・変わったね、あんた。

男 現在、改造中・・・改造人間。

女1 って言うか、無理してる感じ。

男、仏壇の引き出しから印鑑、女1、バッグから朱肉。

女1 どうして今日にしたの。

男 忌明けだ・・・親父が死んで四十九日。

女1 ああ・・・そうだったね。

男 ・・・・。

女1 ほら、ここ。

男

.....

男、離婚届に捺印、と同時に男達が突然喋り出す。

父3 やっちまった・・・。

父2 どうとう押したか。

父4 ああ、鈴木家の恥っさらしだ。

父3 よく言うよ、この女たらしが。

父4 女遊びはいいが離婚は駄目だって言ってるんだよ、俺は。

父2 しかしまあ、今じゃ離婚も珍しくはないし。

父5 タハハ、自由主義のなれの果てだな。

父6 (洗濯機から)おーい、俺にも聞こえるように話してくれ。

父1 何・・・何が何だって？

父2 卓也が離婚届にハンコ押したんだよ。

父1 うんうん、アンコは好きだな。

父4 ほっとけ、もうボケてんだ、そいつは。

父3 おい、失礼なこと言うなっ！

父4 俺が俺の事言って何が悪い。

男 ゴチャゴチャ言うな・・・。

女1 え？

父2 その通り、こいつの人生なんだから。

父3 ハッピーバースデー ツー ユー・・・

父5 何、急に。

父3 歌ってやろうじゃねえか、今日からがこいつの第二章なんだ。

父2・3・5 ハッピーバースデー ツー ユー ハッピーバースデー ツー

ユー(歌う)

父6 おい、なんで進駐軍の歌うたってるんだあ。

父2 いいから、歌えっ！

父達 ハッピーバースデー デイア マイサーン ハッピー

男 やかましいっ！

女 1 ……。

父達 (黙る)

男 ……ウワンウワンウワンウワン…まるで蝉みたいだ。

と、父達がモソモソと一斉に動き出す。

父1はベッドの中に、父2は「父」の遺影を手にしてトイレの中に、父3は「父」の位牌を手に押し入れに、父4はウクレレを手に玄関から、父5は「父」の遺骨を手にベランダから、父6はそのまま洗濯機の中に…それぞれ去っていく。

そして部屋には、男と女1の二人…祭壇の上には「母」の遺影だけが微笑んでいる…。

やがて…蝉の鳴き声がかすかに聞こえてくる。

真夏の昼過ぎ頃だろうか・・・遠くで蝉が鳴いている。

今、男は離婚届に判を押したところだが・・・。

男 ごめん・・・。

と、男はその離婚届をいきなりクシャツと丸める。

女1・・・。

男 何がなんだか・・・。

女1 なに？

男 いや・・・。

女1 何がなんだか・・・なに。

男 だからさ・・・おふくろ死んですぐって・・・やっぱり、ちよつとき。

女1 急すぎるってこと。

男 や、急じゃないけどさ・・・もちろん。

女1 だよね。

女1、バックの中から新しい離婚届を出して男の前に。

女1 ほら、ここ、名前書いて印鑑。

男 ・・・・何枚持ってた、お前。

女1、束で出す。

女1 百枚くらい？

男 ・・・・。

女1 区役所いけばいくらでも・・・まあ、日本中の夫婦が離婚できるくらいの枚数はあるでしょうって言うか、なきやいけないよね、一応。

男 ・・・・。

女1 こんだけあればいくらあんだでも決心つくと思って。

男、ウロウロと立ち上がる。

女1　・・・なに。

男　いや、シャツ・・・。

女1　・・・。

男　こんな格好で判押すのもちよつとな・・・。

男、洗濯機を開ける（もちろん父6はいない）。

男　ああ、忘れてた・・・通夜の前に洗ってそのままだ。

男、絡まった衣類からシャツを引っ張り出して着る。

男　着てりや乾くかな・・・。

女1　（うんざり）

男　あ、ついでに干しといたほうが

女1　いい加減にしてよっ！言ってあったはずでしょっ、お母さんの葬儀が済んだら即刻提出するって！

男　怒鳴るなよ、親父が起きる。

女1　本当に百枚使い切る気？

男　押さないとは言ってないだろ、押すよ・・・判ってるって・・・俺だつて。

女1　ほら、ここっ！

男　だからさ、こんな調子でいいのかってことなんだよ・・・つまり。

女1　は？調子？

男　これって俺たちの最後の共同作業だよ・・・ま、言い方変だけど。

女1　・・・。

男　なんかもう少し気分良く・・・いや、違うな違う違う、そうじゃなくて・・・落ち着いた気分っていうか・・・こんなバタバタした中で終わっちゃっていいのかなってさ。

女1　明日になれば押す気になれる・・・ってこと。

男　そうじゃない、もちろん今日でもいいんだ・・・そういう話になってた

んだから・・・単純に時間の問題じゃなくて、その・・・状況かな、やっぱり。

女1
・・・。

男 言ってる意味、判るかな。

女1 婚姻届に判を押すみたいに離婚届にも判を押したい。

男 ああ、ちよつと近いかな。

女1 マンションの賃貸契約書に判を押すみたいに離婚届にも判押したい。

男 や、ちよつと離れた。

女1 自動車保険に判押すみたいに離婚届にも判押したい。

男
・・・。

女1 クロネコヤマトの受け取りに判押すみたいに離婚届に判押したい。

男
・・・おい。

女1 地下鉄6号線開通記念スタンプラリーみたいに離婚届に判押したい。

男 ちよつと待てよ。

女1 どれだと思う、私が判押した時の気分。

男 え。

女1 スタンプラリー？

男 思っけないよ。

女1 馬鹿みたい・・・。

男
・・・。

女1 なに、噛み締めたがつてんのっ・・・。

男、扇風機のスイッチ・・・ノロノロと回り出す。

男
・・・昨日の葬儀でさ・・・出棺の後だけ・・・京都の叔母さんに聞かれたろ。

女1
なにを。

男 親父が一人になっちゃうけどこれから どうするって。

女1
ああ。

男 「お母さん倒れてからずっとうちの人が一緒に住んでますから」ってお前そう言ったよな、叔母さんに・・・その「うちの人」ってニュアンスがさ・・・まだ、なんて言うか・・・。

女1 ……。

男 そりやもちろん親戚の手前もあるんだろうけど……。

女1 ……。

男 まあ、いいや……何でもない……ごめん。

女1 優しい人……。

男 え？

女1 って世間では通ってるんだよね。

男 なに？

女1 得だね、「優しい人」。

男 ……。

女1 この期に及んでもまだ夫婦関係修復できる可能性が一厘でもあるんじゃないかって思ってる。

男 そんな訳。

女1 あるんだよ、あんた今までずっとそうして生きてきたんだよ、そのうち喉元過ぎたら何とかなるって、で実際何とかなって生きてきたんだよ。それがあんたの処世術なんだ、他人に傷負わしても自分が傷まみれになるだけは避けたいんだよ、一見あんたの周りは波風立ってないように見えるからボロボロにされた沈没船が沈んでたって判らない……得だね、「優しい人」。

男 ……。

女1 どうなの、「優しい人」。

男 （立ち上がって）やめろっ！

女1 怒ってないくせに……そうゆうポーズやめてくれる？

男 ……沈没してんのは俺だ……。

女1 全然足りない。

男 ……これ以上、どう沈めってんだよ。

女1 お母さん殺したのあんたなんだよっ！

男 ……。

女1 こんなことお母さんの前で言いたくなかったけど……だって、そうじゃないの。

男 ……。

女1 あのとのお母さんの顔、一生忘れられない。

男 もう言うな。

女1 親戚って情報早いんだね、あんたが郵便局クビになったこと皆知ってた・・・理由までちゃんと、どっから個人情報漏れてんだろって思った。お母さんのことなんかそっちのけだよ、みんな私たちの顔色覗き見して・・・あんな葬式ってあるかつ・・・可哀相に。

男 気にしてるからそんな気がしたただけだろ・・・。

女1 全然、足りない。

男 ・・・畜生・・・畜生。

男、うずくまる。

女1 判押せよ、早く。

男 ・・・畜生・・・。

女1 「優しくない人」で通ってるから・・・私は。

男 ・・・畜生・・・。

女1 そんなふうにしか生きてこれなかったんだから・・・私は。

と、気付くといつの間にか父1が覗いて見ている。

女1 ・・・お父さん。

父1 何しとるの？

女1 まあ・・・いろいろ・・・。

父1 母さん、どこ行ったかな。

女1 え？

父1 母さん。

女1 え・・・お父さん・・・覚えてないんですか。

父1 おかしいんだこれ、この爪切り・・・ちつとも切れん。

女1 ・・・それ、ホッチキスです。

父1 え？

男 ・・・あっち行ってろ・・・。

女1 紙とか留めるヤツですから、それ。

父1 あんたでは判らん・・・母さんどこいった、母さん。

男 死んだんだよっ！
父1 死んだ？ え？
男 これ見りゃ判るだろ。
父1 ……ああ……母さんだ……
男 そうだよ、俺が殺しちまったんだよっ！
父1 殺した？ え？
女1 あの、お父さん横になって下さい。
男 ……バナナ食わせとけよ。
女1 バナナ？
男 バナナ食わしときや大人しいんだよ。
女1 チンパンジーじゃあるまいし。
父1 おーい、母さん、おーい（ウロウロ）。
男 冷蔵庫の上……

女1、バナナを一本切って父1に。

女1 どうぞ……
父1 醤油は。
女1 は？
父1 醤油（バナナにかける素振り）。
女1 ……そのまま食べて下さい。
父1 ふーん……

父1は不機嫌な表情でベッドに戻ってバナナを食す。

女1 殺したって言わないでよ。
男 お前が言い出したんだろ……
女1 知らなかった……あんなに訳判らなくなったたなんて……
男 ハハ……日に日に溶けてくんだ、脳味噌……
女1 知ってるんでしょ、あんたの事も。
男 ……さあな……全部吹っ飛んじゃってんだ……

と、玄関のチャイム。

女1 ある意味幸せだな。

玄関のチャイム。

男
・・・。

男、うづくまつたまま動かない・・・女1、仕方なく出る。
ドアを開けると質素な制服の女性が立っている。

女2 菊丸葬祭でございます。この度は御愁傷様でございました。

女1 ああ、あなた・・・。

女2 はい、鈴木様葬儀担当の田中でございます。あの、中陰壇のほうはもう
安置されましたでしょうか。

女1 ちゅういん？

女2 あれ？まだうちの者がお持ちしておりませんか？

男 (来て) おります、午前中に男性の方が組み立てて・・・。

女2 さようございますか。では只今からご説明の方をさせていただきます。

女1 あ、ちよつと待って下さい。

女1、男を部屋に引っ張って。

女1 布団。

男 ああ。

男、布団を押し入れに(もちろん父3はいない)、女1は離婚届を目の届かないところに片付けようとして・・・。

女1 (無い！)

男 どうぞ。

女2 失礼します。

女2は祭壇の前に座ると蠟燭とお線香。

男 この祭壇、正式には中陰壇って言うらしいんだ。

女1 (小声で) どこやったの。

男 何を。

女1 (小声で) とぼけないでよ。

女2 よろしいですか？

男 はい。

女2 お亡くなりになりましたから四十九日間を中陰と申しまして、この世に生まれた瞬間を「生」が「有る」と書きまして「生有」、生きている間を「本有」、死の瞬間を「死有」と呼びまして、次の世に生まれ変わるまでの期間を「中有」すなわち「中陰」と呼ぶのでございます。

女1 (キョロキョロ)

女2 あの。

女1 へ？

女2 何かお探しでしたらどうぞ。

女1 いえ、大丈夫です。

女2 続けさせいただきます。中陰期間はこのように「中陰壇」を安置します。その間お花、灯明はたやさないようにお願いいたします。お水は毎朝必ず換えて下さい。中陰の四十九日の間は故人にとって行き先が決まる大事な期間ですので、遺族の方々は喪に服し派手な行為は謹んでいただきますようお願いいたします。なにか質問がございましたらどうぞ。

男 行き先が決まるって・・・天国か地獄かってことですか。

女2 はい、行き先は「天上界」「人間界」「飢餓界」「畜生界」「修羅界」これを六道と申しましていずれかに来世が決まるとされております。

男 え、行き先は我々次第って事なんですか。

女2 はい、故人が成仏できます様、生きている者が善い行いをし力を貸してあげる事を追善供養と申します。

男 派手な行動って・・・どの辺りまでが派手なんですかね。

女2 はい、結婚式はもちろんパーティにコンパ、つまりパーティーとした行動全てです。

男 たとえば・・・離婚するだとかは・・・。

女2 もつての他でございます。

女1 ……。

女2 四十九日経ちましたら中陰壇のほう引き取りにまいります。こちらの白木のお位牌から黒塗りのお位牌に換えてご仏壇に安置してください。お墓に納骨される際に必要ですのでこちらの「埋葬許可証」は遺体とともに大切に保管しておいて下さい。

と、父1がバナナの皮とホッチキスを手にフラフラ来る。

父1 やつぱりこの爪切りおかしいな、

女2 お邪魔しております。この度は御愁傷さまでございました。

父1 どなたさん？

女2 菊丸葬祭の田中と申します。

父1 あんたでは判らん・・・母さん、どこ行った。

女1 お父さん、それもらいます、皮。

父1 おーい、母さん、おーい（ウロウロ）

男 （バナナと醤油持つてくる）・・・ほら。

父1、バナナと醤油を手に満足気にベッドへ。

女1 大丈夫かな・・・（と、皮を捨てようとしてゴミ箱に離婚届発見）・・・！

男 いやいや、どうもすみません。

女2 ああ・・・いえいえ・・・以上でございますが、御質問ございませんか。

男 はい。

女2 あの・・・付かぬ事を伺いますが鈴木様のお住まいはこちらではございませんですね。

男 はあ・・・。

女2 つまりはお父様は一人暮らし・・・。

男 今、僕と一緒に住んでますんで。

女2 奥様とは別々に？

女1 あの、何でしょう。

女2 いえ、私どもでは伴侶を亡くし一人暮らしを余儀なくされたお年寄りのためのマンションなどもご用意させてもらっております……。

男 老人ホームですか。

女2 介護付きマンションです。認知症のお年寄りの方にも安心して入居していただけるよう、専門の介護士が生活のサポートをしております。

男 認知症？

女2 昨年までは痴呆症と呼ばれておりましたが、ボケ老人の人権を尊重するとして認知症と改められました。

男 へえ……認知できないのに認知症とはこれいかに。

女2 アハ……只今キャンペーン中でございまして、契約された御遺族の方々にもれなく「金色に輝くお釈迦さまストラップ」を呈呈しております。

女1 そうなのいいです、この人が面倒みますから。

女2 一応、パンフレットだけでも。

女1 いいです、この人「優しい人」ですから。

男 ……。

女2 アハ……そうですね、優しくそうなお主人ですもんね。ではまた何かございましたらご連絡下さい。

女2、帰っていく。

女1 ……信じられない……。

男 うん……葬儀屋が老人ホームなんてなあ。

女1 ……。

男 え……なに。

女1 (ゴミ箱から離婚届)……。

男 ああ……見られちゃマズイと思って。

女1 (丸める)……。

男 慌てて掴んだらクシャって……。

女1 ……。

男 ごめん……判押すつもりはあるんだよ、本当に……あるんだけどさ。

女1 ……。

男 ちよつとだけ整理させてくれよ……ちよつとだけ……。

女1　・・・。

男　今の人も言ってたし・・・喪に服すようにって・・・。

女1　私、クリスチャンだから・・・。

男　いつからだよ・・・。

女1　香典返し、ちゃんと始末しといてよ。

男　え、帰るのか、おい・・・。

女1、帰っていく。

男　・・・。

男、離婚届の束を拾い上げて、一枚ずつシワを伸ばすと、改めて目を通す。

男　・・・「黒インキ又はボールペンで記入のこと・・・・・・・・（黙読）・・・」

男、離婚届で紙飛行機を作って飛ばす。

男　・・・墜落。

男、次々に紙飛行機を作っては飛ばす。

父1、その様子を見ている。

父1　・・・。

男　作るか、親父も？

父1　何だ、それ？

男　飛行機。

父1　ふうーん・・・。

二人、紙飛行機を作りながら・・・。

男　どうする・・・これから。

父 1 何が？
男 どうしような・・・これから。
父 1 なあ・・・これ、母さんだなあ・・・。
男 ああ。
父 1 死んだのか・・・母さん。
男 昨日、葬式出たろ・・・全然覚えてないのか。
父 1 ・・・・ああ・・・そーいやあ、京都のねえさんが来とったなあ。
男 心配してたぞ。
父 1 そうか・・・死んだんだったな・・・。
男 ああ。
父 1 買い物に出とるんだと思っとった・・・しばらく見んからどこまで買
男 い物行つとるんだろと思っとったけど・・・そっか、死んだんだ。
父 1 三週間も植物状態だった。
父 1 あー、植物か・・・あれ・・・。
男 ん？
父 1 こっからどう折る・・・。
男 こうしてこうすりや羽根ができる。
父 1 ふーん・・・。
男 ・・・・(飛ばす)
父 1 美津子さんは。
男 いないよ。
父 1 死んだのか。
男 帰ったんだよ。
父 1 お前は。
男 え。
父 1 帰らんでええの？
男 離婚するから。
父 1 ふーん・・・。
男 仕事も無いし。
父 1 ふーん・・・。
男 何にも無いんだ、もう・・・。
父 1 これで飛ぶんかな。

男 落ちるだけだよ……。

父 1 (飛ばす)……おお、飛んだ……酒、くれ。
ない。

父 1 母さん、酒ないかなあ。
……。

男 どこにおるんかな。
だから……ここだよ。

父 1 これ……母さんだなあ。
ああ。

男 死んだのか……母さん。
昨日、葬式出たろ……やっぱり覚えてないんだな。

父 1 ああ……そういやあ、京都のねえさんが来とったなあ。
心配してたぞ。

男 1 そっか……死んだんだったな……。
ああ。

父 1 買い物に出とるんだと思っと思った……しばらく見んからどこまで買
い物行つとるんだろと思っと思ったけど……そっか、死んだんだ。
三週間植物状態だったんだよ。

男 1 ああ、植物か……あれ……。
ん？

父 1 こつからどう折る……。

男 1 だからこうしてこうすりや羽根ができる。
ふうーん……。

父 1 ……(飛ばす)
美津子さんは。
いないって。
死んだのか。
帰ったんだよ。
お前は。

男 1 帰らなくていいんだよ、離婚すんだから。
仕事もないんだっけ。
覚えてるじゃないか。

父1 これで飛ぶんかな。
男 飛ばない。
父1 (飛ばす)・・・おお、飛んだ・・・酒、くれ。
男 ないって、俺は飲まないんだから。
父1 母さん、酒ないかなあ。
男 ・・・
父1 どこにおるんかな。
男 ・・・メビウスの輪だ・・・。

男、台所から料理酒を持ってきてコップに注ぐ。

男 ・・・ほら。
父1 熱爛がいいなあ。
男 ミツカンで我慢してくれ。
父1 (一口)・・・こりゃあ、甘口だ。
男 そりゃそうだろ。
父1 (一気に飲む)プウ・・・おかわり。
男 よく飲むなこんなの。
父1 おかわり。
男 これ飲んだらもう寝ちゃえよ(注ぐ)。
父1 (クイツと飲んで)・・・雷電だな・・・。
男 なに。
父1 (紙飛行機をシゲシゲと)・・・これは・・・雷電だな。
男 ・・・
父1 雷電はな、B-29を撃ち落とすために作られた戦闘機でな・・・知っ
男 とるか。
父1 聞き飽きた。
男 こんなふうには離陸するんだぞ・・・(飛ばす)・・・あれはいつ頃だっ
父1 たかなあ・・・土浦から名古屋の三菱工場まで雷電を取りに行ったん
男 だ。
父1 飲むとすぐにその話だな、まったく。
男 片足が出なかったんだ、雷電の・・・そのまま着陸したらえらいこと

になるでな。

男 よし、ベッド行くぞ（父1を抱える）

父1 どうしようか思いながらクルクル空の上を旋回しとったんだけど

男 ほら、立てよ・・・立てって。

父1 嫌だっ、嫌だっ。

男 昔話聞いたられる気分じゃないんだよ、俺は。

父1 つまらん・・・。

男 え。

父1 お前はつまらんっ！

男 ・・・・。

父1 つまらん・・・つまらん・・・つまらん・・・。

父1の視線の先には「母」の遺影・・・。

父1 ・・・・つまらんなあ・・・。

男 ・・・・ああ・・・俺はつまらんよ、つまらん男だよっ！けっつまずいて踏み外してだらしなくてつまらん男なんだよっ！だからさ、あんたはしっかりしてくれよっ！なあ、親父頼むからよお・・・立てっ、立てっ！

男、抵抗する父1を無理矢理ベッドに引きずって行く。

男 ハアハアハア・・・だったら寝てろ・・・死ぬまで寝てりゃいいんだ

よ・・・。

父1 ・・・・あれ・・・蝉か。

男 え？

父1 ・・・・蝉が鳴いとるんだな。

蝉？

父1 耳の中にウジャウジャおるっ！

男 ・・・・。

父1 ウワン・・・ウワン・・・ウワン鳴いとる・・・耳の中で鳴いとる・・・。

男 おい・・・おい、大丈夫か・・・あっ！

父1は小便。

男 ちびりやがった・・・

男、父1をまた引きずるように今度はトイレへ・・・。
トイレの中でズボンを脱がしたり。

男 まだ出るのか。

父1 ……。

男 勘弁してくれよ・・・もう・・・。

男、トイレの電気をつけて父1を置いたままズボンで床拭いて洗濯機の中へ・・・コップに飲みかけの料理酒・・・男、いきなり一気に飲み干す。

男 オエッ・・・。

さらに容器からゲホゲホとラッパ飲み・・・無理矢理飲み干すと散らばった離婚届を抱きかかえるように寝転がる。

男 ……もう・・・勘弁してくれよ・・・。

と・・・蝉の鳴き声が聞こえてくる。

男 ……本当だ・・・蝉が鳴いてる・・・。

やがて・・・蝉の声が止むと同時に窓から月明かり・・・あつという間に夜中になった・・・。

男はそのまま眠ってしまっている様子・・・。

と、突如冷蔵庫が開いて中からハワイの民族衣装を着た若い女が現れる。

女3 ……さぶっ。

女3、冷蔵庫のドアをボタンと閉めると男、目が覚める。

男 ……ん……。

女3 ごめん、起こしちゃった？

男 や、いいけど……頭痛え……。

女3、流し台に腰掛けて男の様子を眺める。

男 ……あれ……何時だ……。

テーブルの上……空の料理酒……離婚届の紙飛行機……状況を徐々に把握……トイレに入れた父1……ついたままのトイレの電気。

男 おい……おーい……まだ入ってんのか？（ノック）……おい、どうした……（ノック）大丈夫か……おい……開けるぞ。

男、トイレのドアを開けると便器にしがみつくように父1が倒れている。

男 あっ、親父！ ……おい、親父、しっかり……うわああああああっ！

男、トイレから飛び出る。

男 ……なんだあ、なんだあ……これ……うわあっ。

男、もう一度父を確認……。

男 皮……え？ 中身……うわあ……中身は……。

と、ベッドから声。

(声) うるさいっ！ 何時だと思ってんだっ！

男 え・・・？

薄暗い中、父2が裸で立っている。

男 ・・・・あれ。

父2 夜中に騒ぐな、近所迷惑だろ、馬鹿。

男 ・・・・誰・・・え・・・あんた？

父2 寝ぼけとるのか、卓也・・・いいから早く寝ろ。

父2、ベッドのタオルケットの中に潜り込む、

男 ・・・・親父・・・。

女3、台所に座ったままずっとその様子を眺めている。
暗転。

翌朝・・・。(女3の姿はない)

女1がトイレの前に立っている。

女1 ……何、これ……。

男 だから「ぬけがら」だって言ってるだろ。

女1 マジで言ってるの。

男 なら何だよ、それ。

女1 私が聞いているんでしようが。

男 他に何て言うんだ、「ぬいぐるみ」か。

女1 死体。

男 じゃあ触ってみろよ、フニャフニャだぞ……ヒジだって逆に曲がっちゃうぞ、頭突いてみるよ、空気の抜けたドッジボールみたいにへこむんだぞ。

女1 (トイレ掃除のタワシで突く)……いやああ、ホントだあ……。

男 な、な、だろ。

女1 中身は？

男 コーヒー飲みに行った。

女1 は？

男 喫茶店。

女1 ……。

男 日課だったんだよ、朝は6時に起きて下山公園散歩してから「ロキシー」って行きつけの喫茶店でスポーツ新聞読みながらモーニングセット。

女1 日課って……満足に歩けなかったじゃない。

男 だから俺がまだここに住んでた頃の話、とにかく十……いや、二十くらい若くなってるんだよ、親父。

女1 ……昨日、変なモン食べさせた？

男 や、特に……まあ、強いていえば料理酒くらいかな。

女1 何飲ませてんのっ！

男 でもそれは俺も飲んだんだよ。

女1 ……一体、何してたの……あんた達。

男 や、普通に……。

女1 (紙飛行機) じゃ何これ。

男 え？ それ、親父が飛ばして遊んでたんだな……たぶん。

女1 ……。

男 (紙飛行機を片付ける)

女1 冗談じゃない……。

と、父2が帰ってくる。

父2 おーい。

男 ……おかえり……。

父2 おいおい、大変だぞお、いつの間にか堀内が監督になっとる。

女1 ……あ。

父2 あれ、お客さんか？

女1 ……ど、どうも。

父2 あ、どうもどうも……どちらさん？

男 美津子だよ。

父2 美津子……さん？

男 え、判んない？

父2 前にお会いしましたっけ？

男 俺のカミさん……って言うか……うん、カミさん。

父2 は？ お前結婚するのか。

男 してるんだよ、もう。

父2 は？ いつの間に。

男 十年くらい前にさ。

父2 何ふざけたこと言っとる……母さんは知ってるのか、このこと。

男 このことって？

父2 お前が結婚前提でこの女……この人とお付き合いしてることだよ。

男 そりゃあまあ……。

父2 俺に黙って……あ、そうですか、いやいやしません……おい、母さんは。

男 なあ、親父……今、自分の歳いくつか判ってる？

父2 何で。

男 何でもいいから。

父2 ・・・卓也、ちよつとこつち来なさい。

男 え？

父2 え？ じゃないよ・・・出来たのか。

男 何が。

父2 子供でも出来たのかって言ってるんだよ。

男 違うよ。

父2 だったらお前どうして。

男 違うんだって。

父2 違うよ。早すぎるんじゃないか・・・お前、今年郵便局入ったばかりだろ・・・そりゃあまあ親方日の丸だから安定してるとは言えもう少し仕事覚えてからでも遅くはないだろ・・・それに見たところあの人とつくに三十過ぎてるんじゃないの？ 今はいいかも知れんけど・・・。

男 親父・・・俺もうすぐ四十一だぞ。

父2 は？

男 ちよつと待って・・・なあ、もしかして俺も若返ってる？

女1 全然。

男 で、親父は八十二歳だ。

父2 馬鹿言え、俺はまだ六十・・・あれ。

男 六十・・・いくつ。

父2 ・・・三・・・四・・・くらいだ。

男 総理大臣は？

父2 中曾根、

男 ・・・。

父2 ・・・違うの？

男 そうか、ひよつとして・・・まだ、昭和？

父2 ・・・。

男 大丈夫・・・ですか？

父2 あれ・・・何だ・・・これ・・・。

父2、祭壇を見つける。

男 死んだんだよ……おふくろ。

父2 ……まさか……。

男 親父は昨日、「ぬけがら」脱いで若返ったんだ。

父2 ……ぬけがら？

男 ほら、これ。

父2をトイレに。

父2 うわっ……何だこれ。

男 あんただよ……昨日までのあんた。

父2 これが……俺……全然似てない気がするけど。

男 二十年後の親父だ。

父2 ……嫌だよお……こんなの。

男 好き嫌いじゃなくてさ……そうなんだよ。

父2 待って待って……昨日は俺……あれ昨日……昨日が随分昔の気がする……。

男 ゆっくり思い出せばいいよ、ゆっくり。

父2 この人は……美津子さんでしたっけ。

男 そう、俺のカミさん、女房。

女1 っていうか……ストレスですけど。

父2 さつき結婚して十年くらいって……。

女1 正確には九年です。

父2 なら、あなたはうちの嫁ですか。

女1 っていうか……ギリギリ。

父2 何です？ そのストレスとかギリギリとか……。

男 生活がね、ギリギリだから。

父2 どももそうだろうけど……あ、これからもこいつ宜しく頼みます。

女1 はあ……頼まれてもどうかなってところなんですけど……って言いますかどうもこうもないんですけどね……もはや。

父2 この人さつきからいちいち良く判らんのだけ……。

男 ゆっくり判ればいいから、ゆっくり。

父2 ……不思議な感じはしたんだ……。

男 え？

父2 ……「ロキシー」のママ違う人だったし……馴染みの客達も見ないし、新聞に「平成」なんて書いてあるし、角の牛乳屋なくなってるし、交差点とこに大きいマンション建ってるし……そうそう……金払おうとしたら千円札がニセ札みたいだった。

女1 あ、それは私もそうでした。

父2 え？ あんたも？

男 いちいち混乱させるなって。

父2 浦島さんみたいだった……。

男 まあ、逆だけだな。

父2 不思議な感じだったよ。

男 うん……。

父2 母さんは……何で。

男 心筋梗塞……七十七歳……。

父2 ……。

男 ……一昨日、葬式済んだところだ。

父2 死んだばかりじゃないか……。

父2、「母」の祭壇の前に腰をおろす。

父2 ……お前……。

父2は「母」の遺影を見つめている。

女1と男は隣の部屋に……。

女1 病院連れてくの？

男 え、病院？

女1 そりゃそうでしょ、原因判らないんだから。

男 病院たって……何科？

女1 そりゃ……皮膚科じゃないかな。

男 皮膚科？

女1 とにかく、ロウソクが消える前に一瞬燃え盛るってアレかも知れないし。

男 縁起でもないこといなよ。

と、父2が寄ってくる。

父2 あの・・・一つ確認しておきたいんだけど・・・ドッキリカメラじゃないよね。

女1 違います。

父2 ・・・・うん・・・うん・・・。

父2、スゴスゴとまた祭壇の前へ。

女1 嫌だからね。

男 え？

女1 何かあっても私が面倒みる筋合いないからね、

男 誰もそんな事言っていないだろ。

女1 お父さんとお母さんは別だから。

男 判ってるよ。

女1 でも・・・まあ、良かったじゃない、寝たきりになられるよりは。

男 そりゃ、まあ。

父2、「母」の遺影を手にする。

父2 ・・・・そうだ・・・妙な夢見たんだ・・・。

男・女1 ？

父2 朝方、俺が寝てたら母さんが突然ベッドの脇に飛び込んできて・・・見たら目えひん剥いて茶色の顔しとった・・・口をパクパクさせて・・・だんだん目が白目だけになって、こりやイカンと思って救急車呼ぼうとしたんだが、番号が思い出せん・・・ちっとも思い出せん・・・とにかく電話のところまで行こうとしたら・・・受話器持って若い女が立っった・・・。

男 若い女？

父2 知らん女がニコニコしながら電話しとる・・・母さんは白目剥いて苦し

んどののに。仕方ないからその女に……「119番だ、119番呼べっ！」って叫んだんだ。

男 それが救急車の番号じゃないか。

父2 うん……俺も叫んでから気がついた……気がついた途端、その女は冷蔵庫の中に消えてった……そんな夢。

男 それ、夢じゃないよ。

父2 ……。

男 それ、おふくろが倒れた時の記憶だよ……親父が通報したんだ。救急隊員の人から聞いた状況と同じだよ……おふくろはベッドの横で白目剥いて倒れてたって……駆けつけた時にはもう心臓が止まってた……。

父2 蝉が鳴いてた……ウワンウワン、鳴いてた。

男 それも夢じゃないよ。

父2 そうか……現実だったか。

父は遺影を戻す……と、同時に台所でカタンと音……。

女1、見てみるとお皿が一枚。

女1 割れてる……。

父2はトイレの「父1」を見つめる。

父2 ……俺は死んだのかも知れんな。

男 生きてるじゃないか、親父は。

女1 ねえ、その若い人ってお母さんじゃないかなあ……。

男 どうして。

女1 や、何となく。

父2 そうか……。

男 え？

父2 もう一度、やり直せるのか……俺は……。

男 ……。

父2、台所の引き出しを探り始める。

男 何。

父2 ゴミ袋どこだ。

男 手にしてる、それ。

父2 こんなじゃなくて黒いビニールの。

男 今それなんだよ。

父2 え・・・丸見えだな・・・ま、いいか。

男 おいおい、どうすんの・・・捨てる気かよ。

父2 こんなジジイとは決別だ。

男 ちよつと待って。

父2 離せ、こんなところにあったら小便するのだって邪魔だろ。

男 もし戻らなきゃならない時がきたらどうするんだよ、

父2 戻る？ またそれ被るの？

男 可能性はあるんじゃないかな。

父2 絶対にヤだぞ、俺は。

チーン、とお鈴が鳴る・・・女1が「母」に手を合わせている。

男 美津子・・・。

女1 帰ります。

男 え？

女1 お父さんも平気みたいだし。

父2 まあまあ、そう急がんでも・・・これ処分したら昼にしましょう、ここは一番嫁の手料理でも頂きたいもんですなあ、ね、美津子さん。

女1 帰ります。

男 美津子・・・。

女1 さつき言ったでしょ。

男 ああ・・・そうだけど・・・。

女1 仕事ありますから、お大事に。

女1、去る。

父2 愛想のない嫁だなあ。

男 そんなことはないんだけど……（父1をズラして）……こうしとけば邪魔にはならないだろ、もう少し様子みてさ。

父2 ちえっ、判ったよ……飯っ。

男 （バナナと醤油）

父2 それだけか。

男 贅沢言うな、昨日まで喜んで食べてたくせに。

父2 チンパンジーじゃあるまいし……醤油なんかどうすんだ。

男 あれ、いらなの？

父2 ……大丈夫か、お前。

男 ……。

父2 母さん、いつから心臓悪くしたんだ。

男 一度倒れたじゃないか、俺たちが結婚してしばらくして。

父2 ……。

男 命に別状ないって医者から聞いて……あんたその日の夕方、病院で酒飲んじゃって看護婦にド叱られたろ。

父2 え？

男 酔っ払って隣の入院患者のベッドで勝手に寝ちゃったんだよ、それであんな出入り禁止になったから美津子がずっとおふくろの面倒見たんだ。

父2 ……。

男 いいよ、無理に思い出さなくても。

父2 うん……。

男 それからニトロ手放せなくなったんだよ、おふくろ。

父2 病気とは縁の無かった女だったんだがな……そうか。

男 医者からも今度爆発したら危ないって言われてたんだけどな。

父2 俺のせいかなあ……やっぱり。

男 え？

父2 俺が心配かける度に、心臓に火薬が詰まってたんだなあ。

男 親父のせいじゃ無いんだよ……おふくろ死んだのは。

二人、黙々とバナナを食べる。

父2 お前んとこは・・・。
男 ん？
父2 うまくいっとらんみたいだな。
男 ・・・・。
父2 美津子さんと。
男 なんて。
父2 見てりや判るさ・・・こんなとこに離婚届が捨ててあるし。
男 あ・・・。
父2 尋常じゃないなあ、この枚数。
男 勝手に見るな。
父2 子供はおらんのか。
男 ああ。
父2 なんて作らん。
男 努力はしたんだけどさ。
父2 そうか、ま、仕方ないが・・・離婚なんてしないに越した事ないんだぞ。
男 ・・・・。
父2 どういう事情があるにせよだ。
男 ・・・・俺が悪いんだ、全部。
父2 そりゃそうだ、こういう場合は大抵男が悪いんだから・・・話してみろ。
男 え、今？
父2 浮気でもしたか。
男 ・・・・まあ。
父2 なんだ、そんな程度のコトで。
男 軽く言うなよ。
父2 相手の女は。
男 大学生の頃に付き合ってた女がいてさ。
父2 佐藤さんだろ？
男 あれ？ なんて知ってる？
父2 この前だったか遊びに来てた子だろ。
男 この前って・・・ああ、そうそう二十年くらい前になるけど。
父2 お前と一緒に訳判らん映画撮った娘な、目がフニユツとした。

男 そう「爆弾娘」って自主映画な・・・そっか覚えてるんなら話早いや・・・で、卒業して別れたままだったんだけど・・・三年前、映研の創立三十周年ってのがあって久しぶりに顔合わせたんだよ。

父2 ありがちな話だなあ、また。

男 うん・・・ホントにな。

父2 男の浮気の一つや二つ目えつむってもらえんのか、美津子さん。

男 しばらくして・・・子供が出来たって言われたんだ・・・佐藤さんから。

父2 え、そっちにか。

男 で、どうしようって・・・言ってきた。

父2 産ませた訳じゃないだろうな。

男 まさか、って言うより嘘だったんだけどな、それは。

父2 嘘？

男 どうも彼女の手口みたいなんだ、繋ぎ止める・・・手口っていうとアレだけど、癖ってのかな。学生の中からそうだったけど極度の寂しがり屋っていうのか・・・とにかく誰かが側にいないと耐えられないんだよ、あいつ。

父2 (思い出すように) ああ・・・いたなあ・・・そういう女。

男 携帯にメールは途切れなく入ってくるし・・・「手首切ってみました」とか・・・飛んでくとピンピンしてたんだけどさ・・・そんな事も何度かあってズルズル・・・。

父2 厄介なのに手え出したなあ、お前も。

男 さすがにもう少し大人になってると思ってた・・・とにかくキツパリ手え切らなきゃって思って、最後に会ったのがひと月前だ。

父2 ズルズルし過ぎだ、いくらなんでも。

男 いや、その間何度も別れようとしたんだけど・・・あいつも可哀想なところがあつてさ・・・バツイチで子供いるんだけど養育費も貰ってなかったり、職場で苛められては長続きしなかったりでさ。

父2 で、そのひと月前、手え切ったのか。

男 ああ、ハッキリさせようとかあいつのマンションに行ったんだ。

父2 お前なそういう時に何で相手のマンションに行っちゃうんだ、馬鹿。

男 うん・・・ホントにな。

父2 で、どうせまたやっちゃったんだろ。

男 やってないよ・・・チョコレート食べて別れ話したただけだ・・・帰り際、あいつが用事があるって言うんで駅まで送ってやることにして助手席に乗せた・・・車をバックさせた途端ドーンて・・・出てみたら小学生が自転車ごと倒れてた・・・。

父2 撥ねたのか。

男 右上腕骨折、全治一ヶ月・・・業務上過失傷害及び酒気帯び運転・・・。

父2 酒気帯び？

男 ・・・・チョコレート・・・ウイスキーボンボンだったんだよ・・・。

父2 え、そんなんで？

男 反応出たんだよお、俺、酒飲めないから・・・三つしか食べてないのに。美津子にはバレるし、郵便局は懲戒免職だし・・・。

父2 ちよつと待て、懲戒免職って。

男 決まってるだろ、酒気帯び運転で人撥ねたら即刻クビだよつ。

父2 ・・・・おいおい。

男 罰金、慰謝料、治療費全額、おまけに退職金はパー・・・。

父2 何もかも・・・お前。

男 人間が駄目になるのって・・・一瞬だ・・・。

男、またうづくまる。

父2 そりや美津子さん、これだけ書くはずだ、離婚届・・・。

男 ・・・・。

父2 ・・・・公務員試験受かった時、これでお前は一生安泰だって信じてたのになあ。

男 うん・・・。

父2 母さん、心配してたんだよ・・・お前、学生の頃映画に現抜かしてたから、まともに就職出来ないんじゃないかって・・・それだけに母さん本当に肩の荷降りたって、泣いて喜んでたのに・・・。

男 親孝行したつもりでいたよ・・・俺だって・・・。

父2 待てよ、母さんはこのこと・・・。

男 (うなづく)

父2 ・・・・。

男 おふくろ、この話きいた次の日に倒れたんだ・・・。

父2　なんで俺に話さんかったんだっ！

男　あんたボケてたから……。

父2　……あ、そう。

男　俺が死んじまえば良かった……。

父2　馬鹿だなあ……お前。

男　うん……。

父2　別れたくはないんだろ、美津子さんとは。

男　……（うなづく）

父2　そうか……そうだったのか……。

男　そうかって？

父2　今、判った……俺が何故生まれ変わったかがな……安心しろ、卓也、俺が一肌脱いでやるよ。

男　……。

父2、もう一本バナナを頬張る。

暗転。

＃4 三日目のこと

翌日・・・。

父1と父2がベッドにもたれている。

男が電話している。

男
・・・だから・・・そうなんだって・・・昨日、俺たちの事話したんだよ、親父に・・・聞かれたからさ・・・そしたら「俺が一肌脱ぐ」って言っさ、本当に一肌脱いじやったんだよ・・・そう・・・判んないって、俺寝てたんだから・・・病院・・・お腹が痛いって保険証持ってつた・・・ちよつと時間あつたら顔出して・・・口実じゃないよ、本当に（切れる）・・・ああくそつ。

男、父二人を眺めて・・・。

男
どうなってるんだ・・・おい。

と、父3が帰ってくる。

父3
どうなってるんだ・・・おい。

男
あ・・・どうだった、病院。

父3
受付の看護婦がさ、この保険証違うって言い張るんだよ・・・俺のだって言ってるのに違いますの一点張りで・・・痛え・・・。

男
診てもらわなかったのか。

父3
言い合いになったから帰って来ちゃった。

男
そうなるだろうとは思ってたんだけどね。

父3
言えよ、だったら。

男
言ったのに聞かずに出てったんだろうが。

父3
ちよつと俺、横になるわ・・・痛え・・・邪魔だな、こいつら・・・もういいかた捨てちゃえ。

父3、ベッドに横たわる。

父3 副作用か・・・これ・・・。

男 何の。

父3 脱皮のだよ・・・朝方脱いだ時は清々しい気分だったんだよ・・・おお、また若返ったぞってなもんでさ・・・一時間くらいしたら急にミゾオチの奥が・・・ああ、痛ええ。

男 あっ！

父3 え？

男 覚えてる・・・俺が小学生の時、親父入院繰り返してた。

父3 入院？ そうなの？

男 手術したんじゃないかな、確か。

父3 嘘、ヤだよ。

男、父2のシャツめくってお腹を見てみる。

男 ほら、ここ切ってる・・・あ、こっちも。

父3 おいおい冗談じゃないぞ・・・え、待てよ、ってことは悪いとこ昔に切ったんだろ。

男 ああ。

父3 だったらもう今、悪いところ無いはずじゃないか。

男 違うよ、今の親父は悪いとこ直前の親父なんだから。

父3 そうじゃないだろ、悪いとこ切った後の俺が悪いとこ切る直前の俺になっただぞ。

男 ・・・・え？

父3 だからすでに悪いとこ切ってるんだよ、俺は。

男 (父3のシャツをめくって) な、ほら切ってないんだよ。

父3 俺はね、でも昔切ってるんだよ、俺は。

男 切ってないんだよ。悪いとこ切ったのは昔の親父んだけど今の親父は悪いとこ切った親父より前の悪いとこ切ってない親父なんだから悪いとこ切ってないんだよ。

父3 よく解らんけど・・・切ってるんだろ、こいつは。

男 見りゃ解るだろ、これ。

父3 昨日の明日は今日だよな。

男 何言ってる。

父3 今の俺は昔の俺だが新しい昔の俺だから・・・あれ？ 切ってないのかな。

男 いいよ、もうややこしいから・・・痛いんだろ？

父3 痛いんだよ、ズーンって。

男 覚えるよ、ガンかも知れないっておふくろ保険のパンフレットかき集めてたから。

父3 何てヤツだ。

男 結局、胃潰瘍だったんだけどな。

父3 その話聞いたらすごく痛くなってきた・・・なんか薬ないかな。

男、救急箱を探る。

男 サクロン。

父3 それでいいや。

男、コップに水・・・父3、薬飲んで。

父3 なら・・・俺は今いくつくらいなんだろう。

男 えっと、だから・・・五十くらいなんじゃないかな。

父3 卓也・・・背中押してくれ。

男 え、どこ。

父3 左の・・・肩の下のほう・・・もうちよい上・・・そこ・・・ギュウって。

男 こう？

父3 そうそう・・・五十か、悪くない年頃だなあ。

男 なんか張ってるぞ。

父3 もう少し強く・・・力ないなあ・・・。

男 (押す)

父3 そんな感じで・・・ギュウって・・・。

男 上に乗らされたよ、よく。

父3 上？

男 背中に・・・やっぱり、ちょうどこの辺りだった。

父3 何年生？
男 覚えてないけど・・・五年生くらいだったと思う。
父3 後樂園、行ったろ。
男 後樂園？・・・中日劇場だろ。
父3 長嶋だぞ。
男 ……引退試合。
父3 うん。
男 見た・・・ああ、見た見た。
父3 総務の横山がドラキチでさ、三塁側のチケット持ってただけで行けなくなつたからつてくれたんだよ。
男 その人覚えてる。よく野球のチケットくれた人だよな。
父3 中日ボロ負けだったけどさすが長嶋だなあ、三塁側だつてのに誰もヤイヤイ言わないなあつて思つてたらさ。
男 ほとんど周り巨人ファンだつたんだよな。
父3 そういやあ、青い野球帽被つてるのお前だけだつたもんな。
男 みんな総立ちになつちやつたから長嶋全然見えてなくてさ。
父3 俺は見た、泣けた。
男 あれ・・・夜行に乗つたつてあん時か？
父3 鈍行な。
男 なんだか心細かつたんだよなあ・・・乗つてる人達の得体が知れなくて。
父3 あれ椅子が垂直だから寝られないんだ、腰が痛くて。
男 新聞敷いて通路で寝てる婆さんがいてさ、俺のことずっと見てるんだよ、もう怖くて仕方なかった。
父3 何言つてる、お前クウクウ寝てたじゃないか。
男 寝たふりしてたんだ・・・一生懸命目えつむつてたんだよ・・・親父の上着必死で握りしめてさ。
父3 それでか、上着の裾シワだらけになつてたの。
男 夜が凄く長かつたな・・・。
父3 おい、また弱くなつてるぞ・・・もっとギユウつて。
男 乗ろうか、上に・・・。
父3 乗りたきやお前も「ぬけがら」脱げ。
男 そうだな・・・(押す)

父3 ついこの間の出来事なんだよ。
男 ……ああ、そんな気がする。
父3 長嶋かあ……もう死んだかなあ。
男 生きてるよ、ちよっとヤバかったけど。
父3 横山は生きてるのかな。
男 いくつ。
父3 俺の二つ下だ。
男 八十か……微妙だな。
父3 よし……ありがと、楽になった。
男 え、もういいの。
父3 一応、サクロン持ってこうかな。
男 どこ行く気。
父3 横山に会いに行く。
男 やめとけよ、生きてるかどうかも判らんのに。
父3 住所判らんかな。(電話台探ったり)
男 死んでたらどうするの。
父3 線香あげてやるさ。
男 生きてたら。
父3 目の前で飛び跳ねてやるさ、こうやって、ハハハ、横山め腰抜かすだろ
うなあ。
男 ドンドンすんな。
父3 おっ、年賀状が取ってある。
男 (取り上げて) 後先考えずに行動すんなんて、あんたは今普通じゃない
んだぞ。
父3 明日はちゃんと診察してもらえよ。
男 腹の具合じゃねえよ。
父3 うるさいなあ、いちいち……母さんかつ、お前は。
男 え？
父3 (取り返す) ガキン時のお前は俺の味方だったのに、やれやれ四十にな
ったら母さん側か……。
男 何言ってるんだ、この数週間誰があんたの面倒見たと思ってる。
父3 判らないヤツだな、お前が面倒見たのはこいつ(父1)であって、俺じ

やない。

男 この親父は親父の後の親父なんだから、当然親父だろ。

父3 もういい、その論争に俺を巻き込むな。

男 (取り返す) とにかく勝手に出歩くなよ。

父3 それだ、その「とにかく」っての、大した理由も無い癖して頭ごなしに自分の意見をゴリ押しする時の常套句、あいつの言い方そっくりだ。

男 相変わらずだな・・・まったく。

父3 何がだ。

男 ちっとも人の話聞きやしない・・・当時のまんまだ。

父3 母さんだよ、人の話聞かないのは。

男 違うね、俺はあんた達の夫婦喧嘩黙って聞いてたけど、正論はいつも母さんだった。

父3 今さら何ぬかす、いつも俺の背中くっついてたクセしやがって。

男 そう思っただけいいさ。

父3 あれ？ 嫌な言い方するなあ。

男 いいよ、もう昔の話は。

父3 お前にとつては昔の話でも、俺にとつては今なんだよ・・・まったく、公務員になんかなつちまいやがって。

男 え、何だよ、それ。

父3 俺は気に食わないんだよ、安定志向ってヤツが・・・どうせ母さんに丸めこまれたんだろう。

男 あんたも喜んでたじゃないか、俺が入局した時。

父3 知らないね・・・喜んだのはこいつ(父2)だろ。

男

父3 少なくともガキの頃は母さんじゃなく俺を頼ってたんだ、お前は。

男 あ、そう・・・俺、このことは言いたくなかったんだけど・・・。

父3 ン？

男 このことは俺の胸の内に収めようと思ってただけだよ・・・。

父3 何だよ、ハッキリ言えればいいじゃないか。

男 なら言わせてもらおう・・・俺は当時、あんたの味方してるフリをしてただけなんだっ！

父3 フリ？

父3 俺を騙したってのか。

男 ああ、そうだよっ・・・俺はあんたに心を開いたフリをしてたんだっ、あんたのご機嫌を取るためになっ！

父3 なんだと・・・貴様、なぜそんな真似を。

男 電線マンを見るためにだよっ！

父3 ・・・電線マン？

男 チュチュンがチュンって奴っ！ あれ観とかないと次の日クラスで会話に入れないんだっ、ツマハジキにされちまうんだっ！ だから俺はあんたに媚売ってチャンネル権を獲得してたんだっ、判ったかっ！

父3 ・・・半泣きで主張する程の話じゃないだろ、それ。

男 小学生にとっては大事な問題なんだよ・・・俺はおふくろをも欺いてあんたに魂売ってたんだ・・・電線マンのために。

父3 ・・・。

男 精一杯演技してたんだ・・・俺。

父3 なんて姑息な・・・どうして正々堂々と挑まないんだ、お前は。

男 だって無理だろ、見せろって言ったら見せてくれたのか。

父3 日和見主義め、そんなだからこんななっちゃったんだ、お前は。

男 ハハ・・・ホント姑息だよなあ・・・この歳になって跳ね返ってくるとはな・・・。

父3 人の顔色ばかり伺いやがって・・・敵を作ることを恐れるな、男なんてのは人に嫌われるくらいが丁度いいんだぞ、卓也。

男 今、そんな人生教訓言われたって・・・。

父3 遅いな・・・確かに・・・。

男 ・・・もつと、色々話せば良かったな・・・あんたと。

父3 ・・・。

男 こんなふうにはな。

父3 話、しなかつたか・・・俺、お前と。

男 ・・・。

父3 そうか・・・。

男 俺が避けてたのかも知れないけど・・・たぶんそうだな。

父3 卓也あ！

父3、いきなり男を抱きしめる。

男
・・・親父。

父3
すまん。

男
謝るのは俺だ・・・親父。

父3
水くれ。

男
え？

父3
興奮したらまたズーンて。

男
明日は必ず診てもらえよ。

男、コップに水。

父3
なあ、俺はお前と酒飲んだか・・・。

男
酒？

父3
駅から坂下ったところに「徳丸」って飲み屋があつてさ、お前が成人したらそこで一緒に酒飲もうって決めてたんだ。

男
行きつけ？

父3
うん・・・飲んだか。

男
いや・・・。

父3
なんだ、行ってないのか。

男
酒、飲めないし。

父3
ちえ、やっぱりお前は母さん側だ。

男
付き合おうか・・・行こうか、その店。

父3
いいよ、今さら・・・飲めない奴と行ってもつまらんし。

父3、薬を流し込むと年賀状に目を通す。

父3
ま、ささやかな夢だったんだよ、お前が小学生の時のな。
男
・・・。

と、玄関のチャイム。

父3 (賀状みながら) お客さんだぞお。

男、ドアを開けると女4が立っている。

女4 あ・・・いた・・・。

男 ・・・・。

女4 ごめん、いると思わなかった。

男 何しに来たの。

女4 お母さん、亡くなったんでしょ。

男 ああ。

女4 私、知らなかったから。

男 知ってたら？

女4 え？

男 知ってたら、葬儀来るつもりだったの。

女4 そんなに愚かじゃない、私。

男 嘘だろ、いると思って来たんだろ。

女4 ・・・・うん、ちよつとね。

男 悪い、帰ってよ。

女4 お焼香させて。

男 顔見せないって言ったろ、お前・・・もう顔見せないって。

女4 ・・・・ごめんなさい・・・本当にごめんなさい。

男 帰ってくれ。

父3 (来て) 上がりなさい。

男 おい。

父3 この人なんだろ、ここで帰したって何の解決にもならん、ちゃんと話を
つけんと。

男 ついてるんだよ、もう。

父3 なら、なぜ訪ねてくる。

男 ・・・・。

女4 お焼香済ませたらすぐに帰りますから。

男 とりあえず今日のところは帰ってくれ。

父3 問題を先送りさせるなっ！ まだ判らんか、卓也。

男 ……
父3 どうです、今日この場でキッチンと話つけませんか。
女4 ……。
父3 上がりなさい。
女4 ……お邪魔します。

女4、祭壇の前に座ると香典を置いてお焼香……。

女4 ……すいませんでした、今日は突然来てしまいました。
父3 いえいえ……じゃあ、俺は行くから。
男 ええ？
父3 ほらこれ、横山の年賀状見つけたんだよ。
男 ちよつと待てよ、話つけるんじゃないのかよ。
父3 何で俺が話つけるんだよ、お前の問題だろ。
男 あんたが上げたんじゃないか。
父3 状況は作った、あとはお前自身がケリをつけろ。
男 おい……。
父3 もう小学生じゃないんだろ、ここは一発男を見せろ、そんじゃあな。

父3、出て行く。

男 ……。
女4 今の人、お父さんじゃないよね。
男 え、ああ、弟、親父の。
女4 懐かしいなあ、この家……。
男 もう済んだろ、帰ってくれよ。
女4 奥さんと別居したんだって？
男 ……誰から聞いた。
女4 田所先輩。
男 田所から？
女4 うん、お母さん亡くなったってことも彼から聞いた。
男 なんてあいつから。

女4 え、だって知らせたんでしょ、映研の人達に。
男 そういう事じゃなくてさ・・・連絡取り合ってるのかって、あいつと。
女4 最近、ね。
男 やめとけよ、あいつは。
女4 何を？
男 あいつのとこ子供いるんだから。
女4 ・・・・失礼ね。
男 違うならいいけど、お前、判んないから。
女4 何が？ え？ 判らないって何が？
男 いいよ、もう。
女4 出たかったんだよ、私だって・・・葬儀。
男 ・・・・
女4 お母さんとここで一緒にビデオ見たんだよね、卓也が撮って私が出てるの。
男 そんな話いいだろ。
女4 「爆弾娘」・・・まだある？
男 さ、帰ってくれ。
女4 冷たいなあ・・・ずいぶん。
男 一体いつになったら俺を解放してくれるんだ、お前は。
女4 そんな拉致監禁みたいな。
男 帰れよ。
女4 もっと優しいよ、田所先輩は。
男 ・・・・
女4 卓也先輩も優しかったけどね。
男 出てけっ。
女4 ウソウソ、田所さんとは何も無いって。
男 そんなこと聞いてない、出てけっ！
女4 ・・・・
男 頼むからっ！ もうお前と顔付き合わせるのには御免なんだよ。
女4 ・・・・ちよつと、それひどい。
男 俺の人生メチャクチャなんだぞ、もう。
女4 最初に誘ったのは卓也じゃない、そうだよ、違う？ 違わないよね。

男 ……またその話か……。

女4 だって……大事なところじゃない、そのところってさ。

男 あん時の状況でどっちがとか……いいよ、それも前に話した。

女4 私が子持ちのバツイチだって知ってたんだよね。私が寂しい事知ってたんだよね。私ならすぐにセックスできると思ってたんだよね。私なら押しかけたりしないと買ったんだよね。そうだよ。

男 ……それも聞いた……。

女4 そうだよ……もう私たちにはこんな話しかないんだから。

男 俺たちはカタがついたろ、違うのか。

女4 ついてないよお、卓也あ。

男 あの日だってそうだ、まんまと俺をおびき寄せやがって……あの日に俺は全てを失ったんだ……家庭も仕事も将来も。

女4 ……。

男 全部ぶっ壊れたっ！

男、香典を女4の前に。

男 持って帰ってくれ。

女4 ……それ、卓也だけかなあ。

男 え……。

女4 私は、ぶっ壊れてないのかなあ……。

男 ……。

女4 そんなに強くないよ……私。

男 判ってるよ、そんなこと。

女4 え、何？ さっき私のこと判らないって言ったじゃない。

男 ……。

女4 壊れちゃったよ……私も、それから……翔太もね。

男 ……翔太君。

女4 あの日、事故さえ起こさなきゃ……何事もなく家に帰って、何事もなく過ごすことが出来たのに……誰も不幸にならずに……。

男 ……。

女4 私達ね、もうあそこのマンション住めないのよ。

男 え？

女4 卓也が撥ねた子、うちの子の同級生だもん。

男 あ……。

女4 そういうこと考えた？ 少しでも考えてくれた？

男 ……。

女4 うちが母子家庭だって隣近所知ってる訳だし……格好のネタになるじやない、翔太だって学校行けなくなるじやない……。

男 ……翔太君、今いくつだっけ。

女4 五年生。

男 ……。

女4 夏休みの間に引越して転校させようかって考えてる……あの子、サッカー部頑張ってたんだけど……やっぱり無理みたい。

男 そうか……。

女4 私達にだって人生はあるんだからね。

男 ……そうか……そうだよな……。

女4 喉乾いた……。

男 え。

女4 ごめん、いい……。

男 ……牛乳しかないけど。

女4 ありがと……頂いたら帰るから……。

男 うん……。

男、冷蔵庫から牛乳出してコップに。

女4 あ、氷入れてね……ぬるいの駄目だから。

男 うん……（そうする）

女4 奥さん、どう？

男 え……どうって。

女4 一番可哀想なの、奥さんかもね。

男 ……ほら。

と、牛乳を持ってきて父1・父2がベッドの部屋に転がっているのが

目に入る・・・男、慌ててシーツを掛ける。

女4 そっち誰かいるの？

男 いや・・・さっきの人が寝てたんだ。

女4 前の旦那がね、再婚するらしいのね。

男 そう・・・。

女4 あ、タバコ・・・いい？

男 灰皿ないし。

女4 ごめん、ならいい・・・でね。その前に一度でいいから翔太とサッカー観に行きたいって言ってきたのね・・・もう、何年も会ってないんだよ・・・翔太に何て切り出したらいいのか判らなくて。

男 ・・・・うん。

女4 あ、ごめん・・・こんなこと卓也に相談する事じゃないんだけどね。

男 いや・・・いいけど。

女4 子供って結局親の都合で振り回されちゃうんだよね・・・特に私みたいなのは母親の資格ないもんね。

男 そんなことないだろ・・・幼稚園だったんだろ、別れた時・・・一人で頑張ってるよ。

女4 奥さんの不妊症、直らないの？

男 え？

女4 そうなんでしょ。

男 ・・・・そんなこと、俺話したか。

女4 相談受けたって、田所さんが。

男 なんであいつ、そんなことをペラペラ・・・。

女4 隠すことじゃないよ、今時多いらしいし。

男 あいつに原因があるって訳じゃないんだよ、特に。

女4 だって・・・卓也は妊娠させられるじゃない。

男 ・・・・。

女4 ごめん、この持ち出し方はフェアじゃないね。

男 ・・・・。

女4 どうしよっかなあ、合わせたほうがいいのかなあ。

男 飲まないの。

女4 え？

男 牛乳・・・。

女4 ありがと、卓也。

男 何が、

女4 頑張ってるって言うてくれて・・・ちょっと嬉しかったな。

男 ・・・。

と、台所でガタンと音・・・男、見に行く。

男 ・・・あれ・・・。

女4 どうかしたのお？

男 鍋が落ちてる・・・。

と、玄関のチャイム・・・男、ドアを開けると女1。

男 ！

女1 お父さん、どうしたって？

男 いや・・・あ・・・お前来たんだ・・・。

女1 ちよつとね・・・(上がる) え、お客さん？

女4 お邪魔してます。

女1 ・・・。

女1、咄嗟に帰ろうとする。

男 違う違う・・・違うんだって！

が、瞬時に思い留まり部屋に戻る。

男 落ち着けよ、な、落ち着けて。

女1 落ち着いてるよ・・・。

男 あ、ホントだ・・・ホントだね。

女1 佐藤さんですよ。

女4 (土下座) ごめんなさいっ、本当にごめんなさいっ！ 今日はお焼香に
来ただけなんです。すぐに失礼します。

女1 ……それ飲んでからでいいですよ。

男 ……。

女1 頭上げてください…顔が見えませんか。

男 すぐに帰るハズだったんだけど親父がさ。

女1 それ、お出したのお父さん？

男 え、牛乳？ ……や、牛乳はまあ、俺が…。

女1 ストロークくらいつけてあげなさいよ、飲みにくいじゃない。

女4 いえ、お構いなく…頂きます(と、一口)

女1 口紅ついちゃうし…。

女4 ……(指で拭う)

女1 見ました…映画。

女4 え？

女1 学生時代にこの人が撮ったっていう短編映画…「馬鹿娘」でしたっけ。

女4 ええ？ 何だろう…いっぱい撮ったんで…「爆弾娘」のことでは
ようか。

女1 ごめんなさい、それでした…全然変わってないですね、当時と。

女4 そんなことないです、十数年も前ですし…。

女1 ホントに、今でも充分「爆弾娘」ですよ。

女4 怒ってますよね…私のこと。

女1 事故の報告を受けた時は…もう今は全然、何とも。

女4 私、いつか奥さんに謝らなきゃってずっと思っていました。

女1 そうですか。

女4 奥さんが一番の被害者ですもんね。

女1 被害者？

女4 ええ、さつきも二人で話してたんです…可哀想だねって。

女1 ……。

女4 ……。

男 判った…佐藤さんもう帰って

女1 (立つ) お父さんどこ？

男 え？

女1 だって私はお父さんに会いにきたんだから。

と、女1ベッドの部屋のシーツをめくる。

女1 ……あ。

女4 え……えっ……ええっ？

女1 本当だ、増えてる。

女4 ……きゃああああっ！ 死んでるう……死んでるう……。

男 死んでない、死んでない。

女4 いやああ……いやああ……。

と、アロハシャツにウクレレ手にした父4が帰って来る。

父4 おいおい、賑やかだなあ、何、どうしたの。

男 ……。

父4 おっ牛乳、これ飲んじやっていい？

男 ……あんた……まさか。

父4 ハハハ、まいっちゃった、また脱いじやったよお。

三人 ……。

父4、牛乳を一気に飲み干す。

暗転。

＃5 その日の夜

部屋にはビールやらつまみ類が・・・。

父4がウクレレで「上を向いて歩こう」を演奏している。

父4 なつみだがこっぼれないよ〜に〜

女1が演奏に合わせて踊っている。

女4は部屋の隅で膝を抱えてこの光景を眺めている。

男の姿はない・・・やがて演奏が終わる。

父4 イイエイツ、アロハ〜っ！

女1 イロ〜ハっ！ (と、ポーズ)

父4 うまい、面白いっ！ (拍手)

女1 そっか、この曲が私生まれる前なんだ。

父4 全米ナンバー1ヒット キュウ・サカモト ジス イズ スキヤキソー
ングっ！

女1 イエ〜。

父4 タンゴっ、ジャンジャカジャンジャン (弾く)

女1 (合わせて踊る)

父4 ヒュウー ヒュウー。

女1 伊達に二十年踊ってないわよ〜。

父4 ちよっと休憩しよ、汗が光ってるぜ、美津子ちゃん。

と、父4タバコに火、どんぶりの中には大量の吸殻。

女1 もう一度カンパーイ。

父4 カンパーイ・・・ほらほら理沙ちゃんも。

女4 ・・・カンパーイ。

父4 正直あいつはどうなのよ。

女1 どうって？

父4 なんかもうこの世の終わりみたいな顔してるけど。

女1 この世の終わりなんじゃない？
父4 俺の最近の記憶の中じゃまだ産まれてないんだよな、あいつ。
女1 ええ？
父4 ちょうど景子の腹人中。
女1 って事は・・・お父さん今、あいつと同じ年だ。
父4 なあ、そのお父さんってのやめようぜ。
女1 何て呼べばいいんだろ。
父4 タクちゃん。
女1 え。
父4 卓二郎だからさ「タク」とか「タクちゃん」とか呼ばれてんの、俺。
女1 ああ・・・でも・・・。
父4 何？
女1 私、あいつのことそう呼んでたから・・・。
父4 嘘、あいつも「タクちゃん」？ しまった、こうなる知ってたら違う名前付けたのに。
女1 よし、付け直しちゃお。
父4 そうだな、まだ産まれてねえんだもんな・・・よし、今にも死んじやい
そうな面してるから「死にかけ」ってのどうだ。
女1 そんな名前ないでしょ。
父4 「鈴木死にかけ」・・・やっぱり変か、ハハハ。
女4 あの・・・。
父4 おっ、いいの思いついた？
女4 私、帰ってもいいですよ。
父4 駄目駄目、笑顔戻るまで帰さないよお。
女4 子供が待ってるんです。
父4 子供も呼んじゃえ、いいよな美津子ちゃん。
女1 ええ、もちろん。
女4 ・・・・。
女1 言ったでしょ、私はもう何とも思っていないって・・・言いませんでした
っけ？
父4 言い方きついぞお、美津子ちゃん。
女1 ああ、私それ悩みな、生徒にもしよっちゅう言われる。

父4 生徒？

女1 ジャズダンス教えてるの、文化センターで。

父4 ジャンジャカジャカジャカジャカジャーン（弾く）

女1 （合わせて踊る）イエー。

父4 あ、そう、なんか勿体ないなあ、あいつには。

女1 賛成え。

父4 理沙ちゃんは仕事なにしてんの？

女4 え、私は派遣です。

父4 はけん？

女1 派遣社員って今はやりなの、手に職がない女性がアチコチの会社行っては軽作業するんですよね。

女4 違います。

父4 だから言い方きつって、美津子ちゃん。

女1 悩みのよお。

父4 コンピューターのプログラミングとか、やってるんです。

父4 へえ、そりゃ優秀だ。

女1 でもお父さんが楽器出来るなんて想像もつかなかったな。

父4 そう？ 俺ね、ハワイアンバンドやってたの。

女1 え？ バンド？

父4 「ザ・ナナクリーズ」・・・オアフ島にナナクリって町があるんだよ、レイ・カーネイってスラック・キー・ギターの大御所が住んでる町でさ。

女1 それで「ナナクリーズ」。

父4 うん、進駐軍相手にね。

女1 へえ・・・進駐軍・・・ギブミーチョコレート。

父4 そうそう、周りはジャズがほとんど、ハワイアンなんかやってる奴ほとんどいないし演奏だって命がけ、なんたってリメンバー・パールハーバーだもん。

女1 へえ、なんかカッコいいなあ。

父4 だろ？ 俺なんかもうモテちゃって大変だったんだぜ、ホントに。

女1 あ、その話お母さんからきかされたあ。

父4 え、景子が何か言ってた？

女1 ずいぶん泣かされたって。

父4 ウソウソ、俺は女房泣かすような真似しないもん、怒らせただけ、ハハハ。

女4 私もちよっとだけコピーバンドやってたんですよ、キーボード。

父4 へえ、理沙ちゃん？

女4 ええ、プリプリを・・・ずいぶん昔の話ですけど。

父4 (お尻つつく)今でも充分プリプリだよお、理沙ちゃん・・・あれ、タバコ切れちゃった。

女4 あの・・・これ、良かったら。

父4 あ、そう？ 悪いね。(タバコに火)

女1 へえ、佐藤さん吸うんだ。

女4 いけませんか？

女1 いいえ、別に。

父4 まあ、女のタバコはあまりみっともないもんじゃないよな。

女1 お父さんもタバコ吸いすぎ、それにチーカマに唐辛子かけたりして、そのうち胃に穴あいちやうぞお。

父4 平気平気、ヤワな胃袋してちや高度成長乗り切れませんって。

女1 スイスイスーダララッタ

父4 スラスラスイスイスーイ・・・よし、決めた、バンド組んじやお。

女1 え？

父4 「モモクリーズ」っての、美津子ちゃんダンサーでさ・・・あいつは何か楽器できるの？

女1 駄目駄目、リズム感ないって言うか運動神経切れてるし。

父4 マネージャーでいいや。

父4、演奏。

父4 ……美津子ちゃん、これ知ってる？

女1 え・・・何だろう・・・ブルーハワイとか？

父4 惜しい・・・「マイ・イエロー・ジンジャー・レイ」・・・スタンダード・ハワイアン。

女1 へえ・・・悲しい感じの曲だなあ。

父4 君と過ごした夢見心地の時間 君を愛してしまいそうだ・・・って曲。

女1 難しいんだよね、フラダンスって。
父4 イッツ ハワイアンタイム。

と、父は鼻歌交じりに歌いだす。
女1、フラダンスを踊る・・・踊りながら女4を見据える。

女1 ……。
女4 ……なんです。
女1 ……一緒にいたいですか？
女4 え？
女1 あいつと……。
女4 別に……。
女1 なら、もう捨てちゃって下さい。
女4 ……。
女1 私も捨てちゃいましたから。
女4 ……。

女4も女1を見据えながら踊り始める……二人、ゆったりと踊っている……。

と、父1と父2が動き出す……部屋のモノ（例えば孫の手とコップとか杖とか）を手にして打楽器に……。

と同時に父5がベランダから、父6が洗濯機から上半身出して、それぞれウクレレを弾きながら現れる。

さらに女3が冷蔵庫から出てきてフラダンスに参加。

「ヒト」「ぬけがら」「靈魂」による大(?)ハワイアンショー。
曲が終わると父1と父2は元の場所に……父5と父6は姿を消し、
女3は冷蔵庫に引っ込む。

父4 イエーイ、アローハっ！
女1 イロ／＼ハっ！
父4 (拍手) いいなあ、いいっ、凄くいいっ！
女4 私帰ります。

父4 え、もう？
女4 さすがにそろそろ帰ってやらないと。
父4 あいつもすぐ戻ってくると思うけど。
女4 ですからその前に・・・邪魔しました。
父4 そう・・・必ず連絡してよ。
女4 え？
父4 だって、「モモクリーズ」。
女4 ・・・・はいっ、ありがとうございます。
父4 そんなじゃあ。

女4、帰っていく。

父4 そんな悪い女って感じじゃないんだけどなあ、ね。
女1 さてつと。
父4 おいおい。
女1 だって。
父4 まだビール残ってるし。
女1 じゃあ、これ空けるまで。
父4 あいつどこまで行ってんだろうなあ、ったく。
女1 ねえ、お母さんとはいつ知り合ったの？
父4 俺？ 二十三、四の頃だったな。
女1 ならお母さんが・・・。
父4 二十歳前後。
女1 うわー、乙女え。
父4 結婚するまで随分ウダウダしてた・・・バンドやってたから。
女1 連れ添って・・・。
父4 だから、えつと・・・半世紀ってことか。
女1 うわあ・・・そう考えると短かったなあ。
父4 過去形なんだ、やっぱり。
女1 私ね、勘違いしてた。
父4 ？
女1 夫婦が駄目になるのは小さい危機の積み重ねだと思ってた、侵蝕され

る感じ？

父4　・・・。

女1　私の得意料理にあいつがいきなりケチャップをかけた瞬間。

父4　ああ。

女1　私が大事にしてたジャネットのビデオテープの上にハッスルしてる小川直也が録画されてた時、ダンスの公演に健康サンダル履いて観に来た時、結婚五年目には観にも来なくてこの先もう観てくれないんだろうなあと予感した時、洗ったカッターシャツが一枚もなくなってる事に気付いた水曜日の朝、あいつが卵かけご飯だけをかき込んで出掛ける様子をベッドの中で伺った二日酔いの朝、・・・私ね、そういう積み重ねだと思ってたんだよね。

父4　違ったの？

女1　違ったねえ、やっぱりデカイ一発だねえ。

女1、突然立ち（壁にもたれて）

父4　おつ。

女1　医者から妊娠は難しいって医学的に宣告された瞬間・・・月に一回指定された日に狙いを定めて射精の直後に逆立ちする・・・セックスの義務化、でもその分強化される信頼と愛情・・・。

父4　酒飲んでんのに、血管切れちゃうぞ。

女1　・・・結構デカかったのかな、これも。

女1、逆立ちをやめると残りのビールを一気飲み。

女1　プハッ・・・ってことで帰ります。

父4　大丈夫？　泊まってるでもいいんだよ。

女1　まさか。

父4　フラフラしてるぞ、美津子ちゃん。

女1　帰ってきたら離婚届郵送するから判押すように伝えて下さい。

父4　でも、「モモクリーズ」はやるうよ、な。

女1　無理無理、フラダンス難しいです。

父4 そ。

女1、祭壇の前に座るとお鈴を鳴らして……。

女1 ……さようなら。

父4 元気出して、な、美津子ちゃん。

女1 何言ってるんの、元気じゃないですか。

女1、帰って行った。

父4 ……(タバコに火)

父4、ゆっくり「マイ・イエロージンジャー・レイ」を爪弾く。

父4 ……悲しい感じの曲か……結構こたえてんだなあ、ああ見えても……ん？

父4、女1が逆立ちした辺りに何か落ちてるのを見つけて拾い上げる。

父4 ……ヘアピンだ。

と、濡れた男がスポーツバッグ抱えて帰ってくる。

父4 うわあ、惜しいなあ。

男 ……。

父4 今の今までみんな居たのにい。

男、ビールの空き缶やら見て……。

男 何やってた。

父4 宴会。

男 ……どれだけ探したと思ってる。

父4 え？

男 これをだよっ、これ！

男、スポーツバッグを放る。

父4 何だ、これ。

男 あんたが公園のトイレで脱ぎ捨てた「ぬけがら」だよっ。

父4 え？ こん中詰めちやったの？

男 見せびらかして歩いてくれるか。

父4、バッグを開けてみると父3の「手」が見える。

父4 あっ、ホントだ。

男 公衆トイレのある公園だったな、一体いくつあると思ってんだ。

父4 だって町並みすっかり変わっちゃっててどこがどこやら判んなくなっちゃってさ。

男 (賀状出して)住所の近くにある公園しらみ潰しに見て回ったけど見つからないし、道行く人に尋ねたけどどうまく説明出来なくて、そのうち夕立になっちゃうし。

父4 え？ 雨降った？

男 スコールだよ、スコール・・・気付かない程盛り上がったって訳か。

父4 そうだよな、汗にしちゃ濡れすぎだなって

男 汗と雨っ、両方！

父4 もう・・・そう怒るなよ。

男 高架下で雨宿りしてたらフニャフニャの親父引き摺って歩いてるホームレスのおっさん見つけたんだよっ、交渉しても自分のもんだって言い張るから千円渡して買い戻したんだぞっ！

父4 別にいいじゃないか、くれてやれば。

男 よく言うよ、あんた・・・俺の親父だぞ、引き摺られてんだぞ、それもホームレスに。

父4 ところでホームレスって何？

男 ルンペンだよっ・・・スッポンポンでほったらかしにしやがって。

父4 じゃなきゃ俺がスッポンポンだもん。

男 その下品なアロハ買った後に服戻すくらいは愛情ないのか、さっきまでの自分だぞ。

父4 一五〇〇円もした、俺の頃ならラーメン三十杯は食べちゃうな。
男 . . .

男、スポーツバッグをベッドの上に置く。

男 美津子いたの。

父4 ダンス披露してくれた、もう美津子ちゃん汗飛び散らかせて。

男 佐藤さん？

父4 バンド組むことにした。

男 はあ？

父4 でも二人じゃバンドって言わないか、二人って何て言うの？

男 コンビ。

父4 ハハハ、それじゃあ漫才だよ。

男 えーと、一体何がどうなってそんな展開になったんだ？

父4 どうもこうもお前が出てから美津子ちゃんがビール買って来てくれて、飲んで騒いで歌って踊って。

男 . . .

父4 安心しろ、二人とも仲良くしてたし。

男 くそっ . . . 気になるなあ . . .

父4 でも美津子ちゃんはおちびつとキツかったかなあ。

男 あのさあ、人の女房にちゃん付けするの止めてもらえるかな。

父4 嫁にちゃん付けするのおかしいか？

男 こういっちゃ何だけどさ . . . 俺の親父って感じしないんだよ、あんたの場合。

父4 そりゃそうだ、俺だって全然実感湧かないもん . . . あれ？

男 え？

父4 お前離婚すんだろ？

男 . . . まあ。

父4 だったら俺がどう呼ぼうと勝手だろ？ そうだ、この際付き合っちゃお

男 うかな・・・俺、今もう独身だし。
父4 正気で言ってるんのか。
男 いきなりケチャップかけるようなマネしないからな、俺は。
父4 何だそれ。
男 覚えてないか・・・ま、そんなもんかもな。
父4 とにかく俺達はまだ法的には夫婦なんだから。
父4 あ、出た「とにかく」・・・いいいいよ、俺は理沙ちゃんの方がタイ
男 プだし。
父4 ・・・。
父4 怒るなって、冗談なんだから半分は。
男 呆れてんだ、俺は。
父4 なあ、お前、完全に置いてけぼりだぞお。
男 何が。
父4 美津子ちゃんからも・・・理沙ちゃんからも・・・あの二人お前より随
男 分と先歩いてるぞ。
父4 ・・・。
父4 離婚届は郵送するってき・・・もはやお前に望みはないよ。
男 ・・・。
父4 なあ、もう観念してさ、タバコ買ってきてくんない？ チェリー、なけ
男 りやハイライト。
父4 いい加減にしるよ・・・お前。
男 あん？
父4 ・・・面影が無いんだよ。
父4 面影？
男 もう俺の知らない男になっちゃってるんだよ・・・あんた。
父4 ・・・。
男 この先、どこまで「ぬけがら」脱ぐのか判らないけど、この先どこまで
父4 行っても俺の知らない男だ・・・そのうち赤ん坊にまでなるつもりか？
父4 ちようどいいな、お前んとこ赤ん坊いないんだし。
男 言ってる意味判らないかな。
父4 は？
男 もう、あんたと一緒に住む理由は俺にはないって言ってるんだ。

父4 おいおい、ここは俺の家だぜ。

男 俺が生まれ育った家だ。

父4 ……。

男 それにここはもうお前の家じゃない……そこに転がってるあの(父1)親父の家だ。

父4 まあまあ、落ち着いてお前も……あ、飲めないんだっけ。

男 ……。

父4 タバコは？

男 ……。

父4 品行方正だなあ、今の時代そんなのが流行ってるのか？ それにしちや女がタバコ吸ってるし……(タバコに火)これ理沙ちゃんくれたんだけど、スッカスカなんだよねえ。

男 理沙の住所教えてやるよ。

父4 あん？

男 コンビ組むんだろ、お前さつきそう言ったよな。

父4 一っだけ忠告しとくけどさ……俺のこと「お前」って呼ぶのやめろよ。どうして。

父4 だって無理してるの見え見えだもん。

男 無理？

父4 「お前」って呼んでもいいかなあ、やっぱり「あんた」くらいにしとこるか、でも強気に出てることアピールしたいし思い切って「お前」って呼んだ方がいいかしらってね。

男 ……。

父4 ほら、凶星だろ。

男 嫌な奴だな、お前。

父4 だから、無理すんなって。

男 …… (見据える)

父4 (顔触って)何かついてる？

男 ガツカリだな……まったく。

父4 失礼しちゃうなあ、人の顔見てガツカリすんなよお。

男 これが俺の親父か……。

父4 当たり前なこと確認すんな。

男 チンピラだな、見れば見る程。
父4 馬鹿、社長だよ。
男 社長？
父4 そうだよお、もつとも今はまだ三人しかいないけどな。
男 何じゃそりゃ。
父4 今の・・・今って言っても俺の今だけだな・・・凄い宅地ブームなんだよ。判るか、田んぼ潰してそこらじゅうドンドン宅地よお。
男 土地転がしでもするつもりか？
父4 もつと頭使えよ、遊具だよ。
男 遊具？
父4 当然、都市計画にも公園が入ってる、そしたらブランコだって必要だろ。俺達はそこに目えつけてさ、新しい遊具の開発研究に取り組んでるって訳だ。目玉は新幹線の形したシーソー、夢の超特急でギツコンバッタン・・・どう？ これ俺のアイデアだぜ。
男 その三人って。
父4 元バンマスとギターとその彼女・・・その女が鉄工所のお嬢さんでさ、うまい具合に親父さん丸め込んで安価で遊具作れば大儲け出来るんだよ。
男 そんな話聞いた事ないぞ。
父4 そりゃ機密事項だもん。
男 そうじゃなくて、俺が物心ついた頃には電話屋で配送してたんだよ、親父は。
父4 え？ 電気屋？ なんで？
男 俺の知る限り親父は社長でも部長でもなかったし、この（父3）時に勤めたトヨタの下請けで定年まで過ごしたんだよ。
父4 なら大日本教育遊具株式会社は？
男 そんな胡散臭い会社聞いた事もねえよ。
父4 え、なら頓挫しちゃったの？ そうなの？
男 知るか、俺が。
父4 ええ・・・ヤバイなあ、俺が彼女にちよっかい出したのがギターにバレたのかもな。
男 そうか・・・あんたの事だな。
父4 え、俺他にもやらかした？

男 おふくろから散々聞かされたよ、浮かれた生活が染み付いて仕事はすぐ
に変わるし女遊びは収まらないし……だから安定が一番だ、「長いも
のには巻かれる」 「寄らば大樹の陰」……そう教えられてきたんだ、
俺は……そうか、張本人はお前だったんだな。

父4 張本人？ え？ やっぱりバレてたって事？

男 出てっつてくれ、この家から。

父4 冗談言うな、この県営クジ当てたの俺なんだぞ。

男 知らなきや良かった、目の当たりにしなきや良かった……こんなチン
ピラ。

父4 あのさ、お前さっきから父親に向かってチンピラって。

男 お前に似なくて良かったよ、俺は。

父4 ハハハ、よく言うよお、人生メチャクチャになってるクセして。

男 くそっ……こいつの血かあ……。

父4 よせよお、お前に俺の血が流れてると思うと気が滅入る。

男 こっちのセリフだっ！

父4 おいおい、喧嘩は無駄だぞお、こっちはアメ公相手に渡り合っつて来てる
んだから。

男 誰が喧嘩なんかするか、黙ってここから出て行きやいいんだよ。

父4 厄介だなあ……同い年の息子ってのはよ……つと。

と、父4は男に掴みかかる。

男 おおっ、いきなり……。

父4 チンピラだとっ、手前、それが父親に向かって吐く言葉かつ！

男 どこが父親なんだ、お前のっ！

二人、しばらくもみ合うが父4、男に突き飛ばされる。

父4は祭壇に直撃、祭壇は崩れ、焼香灰は飛び散る始末。

男 あ。

父4 痛え……見ろ、お前のせいで。

男 なんだ、あんた口だけじゃないか。

父4 へへ、驚いたか。
男 . . .

二人、祭壇を直したり位牌を戻したりし始める。
父4、遺影を手にする。

父4 . . .

男 ちよつと、そっちの足付けろよ。

父4 え、うん . . .

男 誰が。

父4 お前が、だよ。

男 ああ . . .

父4 奇跡と宿命の果てがこいつとはな。

男 奇跡と宿命？

父4、ヘアピンを男に。

父4 ほら。

男 何だよ、これ。

父4 そいつのおかげでお前は産まれたんだよ。

男 ？

父4 まあ、いいや . . . それ、美津子ちゃんの落とし物だ。

男 いらないだろ、別にヘアピンの一本くらい。

父4 いいから持ってるって。

男 . . .

父4 ここにはまだ景子がいるんだ。

男 . . .

父4 だから俺はここにいる . . . どうしても俺と顔付き合わせるのが嫌なら
お前が出てってくれよ。

男 . . .

父4 景子が死ぬまでずっとここに居たんだろ、俺は . . . 景子と一緒に。
男 ああ。

男 父

・ なら、ここは俺の住処だ。
・
・。

父 4、後片付け・・・。

暗転。

蝉の鳴き声・・・。

#6 六日目のこと

昼過ぎ頃……。

父1と父2が祭壇の部屋の隅に移動……父3は押入れの中から半分出た状態……父4は半開きの口にタバコを銜えてウクレレを手にしたまま……「ぬけがら」。

ベッドには露わな姿をタオルケットで隠して顔だけ出してる女2がいる。

男 ……。

女2 ……申し訳ございません。

男 いえ。

男、シャツがうす汚れている。

女2 あのですね、本日伺いましたのは先日チラッとお話しました介護付きマシオンウヒヒツ……マンシヨンの……件でヒヤッヒヤッウヒツ（くすぐったいのだ）。

男 あの、着替えさせてもらっていいですか。

女2 はい、私のほうはいつでも構いませんです。

女2の後ろから父5、顔だけ出す。

父5 もう帰ってこないと思ってたからさあ。

男 ……。

父5 あせっちゃったよお、なあ。

女2 いえ、その……まあ……。

男 悪かった、お楽しみのところ。

父5 ホントだよお、チャイム鳴らしてくれりゃパンツくらい穿く猶予あったのに、なあ。

女2 いえ、その……まあ……。

男 （服着替えている）

父5 あ、代わる？
男 何を。
父5 ねえ、ついでにあの人の相手もしてやってくんない？
女2 いえ、その・・・まあ。
父5 嫌だよな、やっぱり。
女2 ええ・・・あ、でも鈴木様のことが嫌いだとかそういう・・・。
男 いやいや・・・僕はいいですから。
父5 俺さ、気になってさ・・・あんたが出てった後、やっぱり後味悪いってのかな、俺もはしゃぎ過ぎたよなああって深く反省してね。
男 反省してる体勢じゃないよね、それ。
父5 これはさ、何て言うの？ 成り行きで・・・なあ。
男 いえ、その・・・まあ・・・。
父5 どこ行つてたの、この二日間・・・美津子ちゃんどこ？
男 まさか。
父5 だよね。
男 海見てきた。
父5 海？
男 湊に大きい船が留まつてた、ブラジルの船だった。
父5 ブラジル？ 行くの？
男 そんな金ない。
父 海はねえ、でもやっぱり傷ついたときには日本海だよ。
女2 冬じゃないと。
父5 ああ、そりやそうか・・・で、海見てどうしたの。
男 どうもしない。
父5 寝泊まりは？
男 公園。
父5 帰ってくれば良かったのに。
男 だから、帰つて来た。
父5 飯、食った？
男 金がない。
父5 バナナあるよ、冷蔵庫の上。
男 ありがと・・・。

男、バナナを取りに行く。

父5 あのさあ、申し訳ないんだけど、この子の下着取ってもらえる？

男 え。

父5 そっちの部屋に散らばってると思うんだけど・・・あ、ついでに俺のパンツも。

男、バナナと一緒に持ってくる。

女2 誠に申し訳ございません。

二人、タオルケットに包まってモソモソ下着を装着。

男、バナナを頬張る。

男 よく考えたら、ホームレスなんだな・・・俺。

父5 え？

男 帰るとこもなくなってる。

父5 ここがあんたの家じゃない。

男 他人の家みたいだ。

父5 実は俺も馴染みがなくてね、ここ・・・違うとこ住んでたから。

女2 あの・・・。

男 え？

女2 制服もお願いできますか・・・そこに・・・。

男 ああ・・・どうぞ・・・目えつむってますから。

女4、いそいそと制服を着る。

父5 ひとつ頼みがあるんだけど・・・

男 頼み？

父5 判押してやってくれないかなあ。

男 ああ、送られてきたの。

父5 え？
男 美津子から。
父5 ああ、あれね・・・あれは祭壇の上に置いといたけど・・・そうじゃなく
てき、久恵ちゃんがね。
女2 いや、その件はもう・・・。
男 久恵ちゃん？
女2 田中久恵でございます。
父5 そこに小冊子あるんだけど、「福寿荘」って・・・その案内で来たん
だよね。
女2 お父様のご様子が心配でしたもので・・・あ、着替え終わりました。
父5 一応、事態の説明したんだけどね・・・俺が若くなつたのが信じられな
い様子だったから、なら試してみるかい？ ってそんな流れでこうなっ
ちやつた訳なんだけど・・・まあ、いいや、えっと・・・久恵ちゃん、
説明してよ。
女2 これが以前、お話しましたパンフレットです。
男 （パンフに目を通す）
女2 あの・・・いかがでしょう？
男 誰が入るの？
女2 ですよね・・・ですから、もう。
父5 ノルマがあるんだってき、可哀想に。
男 俺が入ろかな。
女2 は？
男 無理だよね・・・。
女2 六十五歳以上となつておりますから。
父5 契約書に判押してやれないかなあ、俺、本当は八十二歳なんだから。
男 何言つてんの、見たところ俺より若いじゃない、あんた。
父5 その辺に転がつてるの代わりに放り込んでき。
女2 本当に、いいですから・・・。
父5 ごめんな、俺がこんななつたばかりに。
女2 そろそろ失礼いたします・・・あの、鈴木様・・・。
男 はい。
女2 今回のことは会社には内密にお願いします・・・。

男 言いませんよ、もちろん。
父 5 帰っちゃうの？
女 2 一応、用件は終了しましたので。
父 5 ねえ、明日にでもまた会えないかな。
女 2 え？
父 5 うん、仕事じゃなく……。
女 2 いや、それは……。
父 5 駄目？ なあ、駄目かなあ。
女 2 追善供養の間はそのような行動は謹んでいただきませんか。
父 5 よく言うよ、あのような行動しといて。
女 2 アハツ……いや、大変申し訳ございませんでした。
父 5 俺さ、もうそんなに時間ないと思うんだ……四十九日も待ってられないからさあ。
女 2 そう言われましても……。
男 ちよつとしつこいぞ。
父 5 そろそろ次の俺が出番待ちしてると思うんだよ……たぶん。
男 ……。
父 5 俺、こう見えても二十歳の頃って真面目でさ……なんたって戦時中だったし、おまけに特攻隊免除の生き残り組だからいじけてたし……景子が初めての女だったの……だからたぶん久恵ちゃんと付き合いおうなんて気、起こさないと思うんだよ。
女 2 ……。
父 5 付き合ってる人、いるの？
女 2 いえ……。
父 5 だったらいいじゃない、別に……駄目？
女 2 ……明日は予定入っちゃってるんで明後日なら。
父 5 え？ ホントに？
女 2 はい。
父 5 約束だよ、どっか行こう……よし、三人で行こう。
男 俺も？
父 5 パアーつとさ、ビヤホールとか。
女 2 あの、追善供養の間は……。

父5 じゃあ地味いいにさ、お寺で俳句練ったり。

男 いいよ、俺は。

父5 どうせすることないんだろ？

男 ないこともないけど……。

父5 何があんの。

男 香典返しの名簿整理とか……しなきやマズイんですよね。

女2 もちろんです……名簿貸していただければ金額にあったお品を私どもで手配いたしますが。

父5 そうして貰おうよ、な……それまで頑張つてこのままの俺でいるから。

女2 名簿のほうは……。

男 その箱に。

女2 請求書は配送完了されましてから御連絡いたします、ありがとうございます
ましたっ。

父5 約束だからね、久恵ちゃん。

女2 はい……失礼いたしました。

女2、名簿抱えてそそくさと帰る。

父5 そうだ、理沙ちゃんも呼んで「モモクリーズ」初演奏会やっちゃおうかな。
な。

父5、父4からウクレレを奪うとまたベッドへ。

父5 ……一番いい時期だよな、俺、今。

男 え？

父5 なあ、あんたはどうだったの……三十くらいの時。

男 うん、良かった……と、思う。

父5 美津子ちゃんと結婚した頃？

男 そうだね……。

父5 離婚しないほうがいいよ、なんとか粘つて……あれ？ 音ズレてるよ、
これ。

とチューニング。

男 予兆、あるの？

父5 「ぬけがら」？・・・判ないんだ、俺にも・・・少し怖くなってきた・・・本当にこのまま赤ん坊まで遡ったらどうなるんだろうって・・・最後は誰かの腹に入っちゃうのかな。

男 そんな馬鹿な。

父5 消えてなくなるのかな・・・ここで止まってくれないかな・・・そしてら、俺働くんだけどな、あんた仕事なくなったんだし、うん・・・俺が働いて面倒見るよ、父親だもんな。

男 いいよ、そんな。

父5 二人でなんか会社始めたりさ、何でもやれそうな気がするんだ・・・何でもさ、だろ？

男 いや、俺は・・・うん・・・。

男、転がっている父達を真っ直ぐにしてやりながら。

男 俺、昨日の朝、蟬が脱ぐとこ初めて見たんだ。

父5 蟬？

男 見たことあるか？

父5 いいや。

男 夜明け前、公園の中トボトボ歩いてたらさ・・・白いモノが地面にいたんだ。何だろうって見てみたら直径二センチくらいの穴があいててそこから這い出てるんだ、その白いモノが・・・ああ、これが蟬の幼虫かって、フツと気付いたら俺の周りにゾロゾロいるんだ・・・もう、本当にゾロゾロ・・・で、木に向かって一斉に這いずってる・・・俺、足がすくんじゃった。

父5 うわっ、苦手なんだよ、その類。

男 いや・・・でもちょっと神秘的だったりもして・・・俺、その場でずっと見てたんだ・・・そのうちだんだん陽が昇ってきてさ・・・襟元でカサッとしたんで触ってみたら蟬の幼虫、見たら俺のズボンにビッシリ幼虫がしがみついている。

父5 うへえ・・・(タオルケットに潜り込む)

男 仕方ないからそのままじつとしてたよ・・・丸一日。

父5 ……。

男 ハハハ、嘘だよ。ズボンにビッシリは・・・でもじつと見てたのは本当だ・・・背中が割れて蟬が出てきた・・・教育テレビで見たまんま・・・羽根がゆつくり伸びてしばらくしたらバタバタって飛んでった。

父5 ……。

男 ちよつと感動したんだよなあ・・・俺もぬけがら脱ぎたくなつちやつた・・・あれ？ おい、出てこいよ・・・もう、気味悪い話しないから・・・なあ、おい。

と、タオルケットがモソモソと・・・父5がベッドからズルリと落ちる。

男 ……あ。

タオルケットの中から父6が顔を出す。

父6 こんな感じでしたか？

男 ああ・・・そんな感じ・・・。

父6 (首をコキコキ)・・・はじめまして。卓二郎です。

男 ……。

父6 なんだか身体がネバネバしてるなあ・・・。

父6、短髪の二十代前半といった感じ。

父6 すみません、着る物ありますか。

男 ああ・・・ちよつと待って・・・えっと、俺のでいいかな。

父6 ありがとうございます。

男、自分の下着やら服やら持ってくる。

男 ふんどしとかは無いけど。

父6 ふんどし？ ハハハ、そんなの水泳の時しか穿きませんよ。

男 ああ、そうだよね。

父6 失礼しますっ。

父6、素っ裸のままベッドから飛び出るとテキパキと服を着始める。

男 ハハ・・・ビックリしたなあ・・・しかし。

父6 私も驚きました、熟睡中にいきなり上官に叩き起こされた感じといいま
すか。

男 ……今、戦時中？

父6 いえ・・・残念ながら日本は負けました。

男 知ってるけど・・・なら戦後。

父6 えーと・・・（記憶を探るように）・・・そうなんですけど・・・接吻
映画・・・えつとタイトルなんだっけ・・・あれ、この間観たのになあ。

男 いや、いいよ・・・無理に思い出さなくて。

父6 すみません、少し頭がボーッとして・・・。

父6、「ぬけがら」達を見回す。

父6 妙な感じだなあ、将来の自分が転がってる・・・この男（父4）も私な
んですね。

男 うん、残念ながらね。

父6 顔つきが穏やかだな、みんな。

男 そうかな。

父6 生活が穏やかなんだ・・・卓也さんも穏やかだ。

男 俺？ 俺は穏やかじゃないよ。

父6 私の周りにはカストリ飲んで死ぬ奴なんかもいますから。

男 何だっけ、カストリって。

父6 粗悪品の密造酒ですよ・・・（ベランダから外を見て）・・・人間、食
い物が無くなると顔つきが違ってきますからね。

男 卓二郎君は・・・この呼び名も妙だけど・・・何か食べるかい。

父 6 いえ、おかまいなく。

冷蔵庫あけるが。

男 あれ・・・ごめん、ちよつと買ってこようか。

父 6 ヤミですか。

男 コンビニだよ、弁当か何か・・・理沙が香典置いていったよな。

父 6 本当におかまいなく、すきつ腹は慣れっこですから。

男 そう？

父 6 このあたりも空襲うけたんでしたっけ。

男 どうだろう・・・あ、でも下山公園に遺影みたいなのあったかな。

父 6 へえ、後で場所教えて下さい。

男 なんか、ドキドキするよ・・・ついこの前まで戦争してた人が目の前にいると思うと。

父 6 私は内地勤務ですから・・・。

男 いやいや、それでも立派だと思うよ、今時の若い連中に比べたら、もう全然。

父 6 そうか、良かったなあ日本、ハハハ・・・うおおおおお。

男 ちよつとちよつと。

父 6 すいません、なんだか叫んでみたくなりました。

男 近所迷惑だから。

父 6 (頭かいて)ハハハ、そうですね、以後、気をつけます。

男 いやあ、いきなりの好青年だなあ。

父 6 ・・・同じなのは空の色と蝉しぐれだけだあ。

と、玄関から女3が買い物袋下げて入ってくる。

女 3 ただいまあ。

男 ・・・。

父 6 あれ？ 景子さん。

女 3 やつと私に追いつきましたね・・・よいしょつと。

父 6 追いついたって？

女3 私たちの出会った時に。

父6 ああ、そうか・・・ハハハ、そういうことかあ。

男・・・。

女3 なにキョトンとしてるの、卓也・・・テーブルの上片付けて。

男・・・おふくろ？

女3 早く、ご飯の支度するから。

男 あ・・・ああ・・・。

父6 そんな格好、誰だつてキョトンとするよ。

女3 似合いませんか？

父6 いや、似合ってるけど。

女3 フフフ・・・。

女3、買ってきたモノを冷蔵庫に。

女3 もお、冷蔵庫の中何も無いんだものお。

男 あんた・・・おふくろ？

女3 面影、ない？

男 いや・・・なんとなく・・・え？ おふくろもぬけがらを？

女3 脱いだ脱いだ、七十七年分そっくり脱いだ。

男・・・。

女3 あとは空の向こうに昇っていくだけ。

男 でも・・・死んだんだろ。

女3 あんた、あの人の話聞いてなかったの？

男 あの人がって。

女3 ほら、葬儀屋の・・・さっきここでイカガワシイ行為してた・・・何さんだっけ？

男 田中さん・・・ああ、中陰がどうのって。

女3 冷麦でいいでしょー。

父6 御馳走だね。

女3 だからね、まだしばらくはここにいろよ。

男・・・。

女3、トントんとネギを刻む。

女3 美津子さんも呼ぶ？

男 え？

女3 って無理か・・・逃がした魚は大きいわよ、凄くいい子だったのに。

男 ああ・・・。

女3 あの子、中学の時お母さん亡くしてるでしょ・・・だからかな、私にも良くしてくれてたのね。

男 似てるんだよ、気丈なことか。

女3 そうなのよ、普段うまくいかないんだけどね、性格の似た嫁と姑って。

父6 向こうが折れてたんだろ、(男に)彼女の気の強さは半端じゃないんです。

女3 そこに惚れて一緒になった癖に。

父6 違うよ、違う違う・・・(男に)運命だったんですよ、もう景子さんとの出会いは奇跡と宿命の果てに生まれたと言ってもいいくらいで。

男 奇跡と宿命・・・。

女3 またその話？ もういいですよ。

男 その話って？

女3 墜落した話。

男 え・・・。

女3 空の要塞B・29撃墜のため作られた戦闘機雷電はあ・・・って話。

父6 俺たち飛行機将校の間では「馬鹿」って呼んでたんだ、B・29は凶体ばかりでかい「馬鹿」ってね・・・快晴だった・・・まだ誰も乗ったことのない戦闘機、凄く角度で離陸するんですよ、ゴオオって。

男 足が出なくて落ちたって・・・。

父6 あれ？ 景子さん話したの？

女3 話すはずないでしょ、私が。

男 この親父(父1)は酒飲む度に・・・チラッとだけど。

父6 そうそう、片方だけ(手で)こんな感じ・・・機体傾けて地面に影映したら右足だけ出てなくて・・・もう胴体着陸するしかないから両足引っ込めようとレバー引いたけどもビクともしない・・・(手で)このままです・・・降りるに降りられないから飛行場の上を旋回してたんです、

グルグルと・・・そのうちプロペラが空回り、燃料切れ・・・そのまま雷電は滑走路めがけて落ちていく・・・片足着陸・・・スピードのあるうちはいいけどそのうち機体がバランス崩してドッカーン！

男 爆発？

父 6 しなかつたんです、燃料がカラになつてたのが幸いして・・・でもさすがに衝撃は凄まじく気が付いたらベッドの上、右目の視力が落ちちゃつて飛行機に乗れなくなつてそのまま終戦・・・同期の奴らはみんな全軍捨て身の特攻隊ですから・・・。

女 3 運が良かったのよ。

父 6 しばらくして故障の原因が判つたんです・・・報告書と共に准尉が持つてきてくれました。

男 何だったの。

父 6 ヘアピンです。

男 ヘアピン・・・。

女 3 男子は兵隊、女子は工場。

父 6 生産過程で落つちてレバーの奥に引っ掛かったらしいんです。

男 ・・・。

父 6 つまり、私は女工さんのたった一本のヘアピンに命救われたんです。

男、父 4 から渡されたヘアピンを取り出す。

父 6 ああ、それ美津子さんが落とした・・・。

男 こんなので・・・奇跡だな。

女 3 偶然よ。

父 6 終戦後、少し落ち着いてからその工場に寄ってみました・・・空襲で工場は無くなつてましてね・・・ましてやその女工さんに会えるなんて思つてなかつたですけど・・・。

男 え、もしかしてそのヘアピン落としたのがおふくろ？

女 3 そんな訳ないじゃない、関係ない関係ない。

父 6 結局その人の事は何も・・・で、便所に行きたくなつて、たまたま飛び込んだあんみつ屋で働いてたのが景子さんでした。

女 3 かき氷注文したのよね、宇治金時の。

父 6 それからちよくちよく顔出すようになりまして。

女 3 映画に誘われたのよ、大坂志郎の『はたちの青春』。

父 6 あ、それだ、接吻映画。

女 3 もう、下心見え見え。

父 6 まいったなあ、アハハ。

男 ちよつと待って・・・アレ？ 宿命はどこ行っちゃった？

父 6 これこそ宿命ですよ、だってそのヘアピンの奇跡がなければたまたまあんみつ屋に入らなかった訳ですから。

女 3 そう言って口説き落とされたのよ。

男 そういう話だったのか、雷電の顛末は。

父 6 ちよつとこんな暑い日だったなあ。

女 3 うん、蝉がウワンウワン鳴いてたね・・・ウワンウワン・・・。

男 ・・・。

女 3 だからね、あんたは偶然とたまたまが重なって誕生したのよ。

父 6 奇跡と宿命と言ってくれ。

女 3 よし・・・出来たわよおー。

大鍋いっぱいに大量の冷麦・・・どんぶりにてんこ盛りのネギ。

男 おいおい、どうすんだよそんなに沢山。

と、「ぬけがら」達が一斉に動き出す。

男 ・・・。

父 2 おお、こりや旨そうだな。

父 4 そうか？ 焼肉が良かったなあ、俺は。

父 3 いいよ、冷麦で・・・腹にもたれる。

女 3 ちよつとどこ行くんです、こつちこつち。

父 1 ん？ そこで食べるか。

と、父達は全員食卓を囲んだ。

父達 いただきます。
女3 はい、どうぞ。

父達は冷麦を食べ始める。

父2 卓也、お前いらんのか。

男 え。

父3 もたもたしてると無くなるぞ。

父5 ちよつとそのネギ取ってくれないかな。

父4 自分で取れよ。

父5 自分だろ？ あんたは俺なんだから。

父4 俺は俺だよ。

父5 俺は俺だけど俺じゃないか。

父3 だからやめろって、その論議は。

女3 はいはい、ネギ取ればいいんですよ。

父2 卓也、いらんのかって。

男 食べるよ、食べるけど・・・（輪に入れない）

父5 おい、お前いっぺんに取り過ぎだぞ。

父6 若いですから。

父5 年上の前じゃもう少し遠慮してたハズだけどな、俺は。

父2 勘弁してやれ、配給生活なんだから。

父3 おい、お前あんまり七味いれるな。

父4 入れなきや旨くないだろ。

父3 お前のせいで俺は胃に穴があいたんだぞ、少しは控えろ。

父4 返せ、七味っ！

父3 馬鹿野郎、誰が痛い思いすると思ってたっ。

女3 喧嘩しないの、食事中にっ！

父1 バナナないんかな。

女3 ちゃんとしたモノ食べてください。

父2 見ろ、また母さんが怒った。

父3 こいつのせいなんだよ、女遊びするから角が生えたんだ。

父4 おい、さつきから俺を目の仇にしてないか？

父3 事実だろ。

父4 女遊び始めたのはこいつだ。

父5 反動だね、こいつが真面目すぎたのがそもそも元凶なんだ。

父4 そりゃ言えてるな。

父6 真面目のどこが悪いっ、誰が日本を守ったと思ってる。

父2 守っちゃいないよ、負けたんだから。

父5 おいおい、そりゃ禁句だよ。

父6 誰だ、今侮辱したのは誰だっ！

父2 俺だよ、あんな馬鹿な戦争はしなきゃ良かったんだ、犬死だ。

父6 犬死だと・・・よくもそんな事を・・・。

父2 お前も後四十年経てば判る。

父6 いつから俺はそんな考えを持つに至ったんだ・・・くそっ。

父4 俺からだな、たぶん。

父3 日本無責任男だからな。

父4 はい、ごくろーさん。

父6 信じられない、俺の将来があんた達だなんて。

父5 俺になると信じられるんだから不思議だよね。

父3 だから七味入れるなって、判んないのか。

父4 景子、俺もう冷麦いいや、この俺うるさいから。

女3 またそんな。残さず食べなさいよ。

父2 ほっとけ、こいつには言っても判らん。

父4 ちよっと待ってよ、俺ってそんなに駄目なヤツ？

父2 今振り返るとそう思う。

父3 俺が一番頑張ったんだ。ガキ抱えてさ。

父5 一番は俺でしょう、結婚まで漕ぎ着けたんだから。

父3 結婚なんて誰でも出来る、母さんと苦楽を共にしたのは俺だ、
そうだよな。 (男に)

男 え？ いや・・・どうなんだろ。

父3 すまん、振った俺が悪かった。

父4 誰かタバコ持ってない？

父2 とっくの昔にやめてるよ。

女3 いい加減にしなさい、とにかく食べるっ。

父2・3 あ、出た！ 母さんの「とにかく」。
父4・5・6 あ、出たっ！ 景子（さん）の「とにかく」。
父1 （立つ）うるさいっ、うるさいっ、うるさいっ！
父達 ……。
女3 死んでまで世話焼かせないで下さい。

父達、黙って食べ始める。

男 ハハハ…。
女3 何が可笑しいの。
男 よくこれだけの親父とやってこれたもんだな…。
女3 好き放題やられました…。
男 ……。
女3 でも終わって見たら、それで充分楽しかった…。
男 ……。

父達、黙々と冷麦を啜っている。

女3、その様子を微笑ましく懐かしむように見つめている。

男、その女3を見つめている。

男 ……おふくろ。
女3 ……。
男 ごめんな…。
女3 いいから、とにかく食べなさい。
男 ……。

男、父達の間割り込んで猛然と食べ始める。

蝉の音が聞こえてくる。

暗転。

夕暮れ。

部屋の中には「ぬけがら」が転がっている。
敷きっぱなしの布団、ウクレレがある。

そして・・・祭壇には「父」と「母」の遺影が並んでいる。

父達
・・・。

二度目のチャイムが鳴って、女1が入ってくる。

女1
・・・。

女1、消臭スプレー・・・飽き足らないのか直接父達にもスプレーする。

女1 殺人現場・・・。

女1、携帯をかける・・・部屋の隅で着信音。

女1 (舌打ち)

観念したかの様に待ちの態勢。

しばらく・・・。

ドアが勢いよく開いて男が入ってくる。

男 ハアハアハア・・・。

女1 なに、ジョギング？

男 ハアハアハア・・・ (話しかけるな)

女1 へえ、あんたでも運動することあるんだ。

男 スウ・・・ハア・・・ (深呼吸)

女1 いつまで出しっぱなしにしとく気なの・・・お父さん。

男、冷蔵庫から生卵五個、牛乳、かき混ぜて一気飲み。

男　ングエっ・・・フワー・・・。

女1　（啞然と見つめる）

男　なに。

女1　や・・・別に・・・どこ。

男　祭壇。

祭壇の上に離婚届。

女1　押してないじゃない。

男　大丈夫、大丈夫。

女1　・・・。

男、洗濯機を開けると中から父6が顔を出す。

女1　ちよつと・・・。

男　うへえ、忘れてた・・・あんまり臭うんで一昨日洗ったんだ、こいつ・・・

ああ、タオルと身体が絡んじまったらあ・・・（におい嗅いで）ちえつ、洗直しだな。

男、シャツを脱いで洗濯機に投げ込み、山になつてる洗濯物からタオルを引っ張り出して汗を拭く。

女1　なんか・・・変わったね、あんた。

男　現在、改造中・・・改造人間。

女1　って言うか、無理してる感じ。

男、仏壇の引き出しから印鑑、女1、バッグから朱肉。

女1　どうして今日にしたの？

男　忌明けだ・・・親父が死んで四十九日。

女1 ああ・・・そうだったね。

男 ・・・・。

女1 ほら・・・ここ。

男 ・・・・。

男、捺印。

男 ゴチャゴチャ言うな・・・。

女1 え？

男 ・・・・やかましい。

女1 ・・・・。

男 ウワンウワン・・・ウワンウワン・・・まるで蝉みたいだ。

女1 ・・・・ちよっと、何言ってるの。

男、離婚届を女1に。

男 ほら。

女1 確かに。

女1、祭壇の遺影を見つめて。

女1 無理だったねえ、私たちは。

男 ああ。

女1 どうだったの、お父さんの葬儀は。

男 親戚連中は迷惑そうだったな、おふくろの一週間後だったから。

女1 そりゃ、さすがに。

男 朝起きたらトイレで倒れてた・・・最初に倒れた時と同じように・・・
八十二歳の親父が。

女1 何だったんだろ、あの一週間の騒ぎは。

男 まだ終わっちゃあいないぞ。

女1 え。

男 うるさんだ、ブツブツ・・・こいつら。

女1 やめてよ。

男、ビデオカメラを取り出して構える。

男 凄いだろ、コレ・・・VX2000、中古でも二十万。

女1 買ったの？

男 田所に借りた。

女1 なんだ・・・まあ、賠償金で首回らないもんね。

男 久しぶりだけど、いい感じだよ・・・学生時代とはモノが違うな。

女1 何撮るの。

男、「ぬけがら」達にカメラを向ける、

男 超私的ドキュメンタリーエンターテイメント、タイトル「墜落男」。

女1 何それ。

男 鈴木家の真実はSEXを越えた・・・出演する？（女1にカメラを向ける）

女1 「爆弾娘」に依頼したら。

男 実家に越したらしいぞ、「爆弾娘」。

女1 そう。

男 うん、やっぱりいい表情してるな、さすがダンサー。

女1 回してないよね、ちよっとやめてよお。

男 判った判った。

女1 （呆れ顔で帰り支度）

男 今日もレッスン？

女1 振り付け頼まれてる、イベントの。

男 へえ、いいね・・・いい調子だね。

女1 そうでもないけど・・・そうかな。

男 今、俺、電器屋で仕事してるから。

女1 そ、良かったじゃない。

男 うん。

女1 じゃ、行くわ。

男　なあ、美津子・・・これ（封筒）

女1、封筒を開けると中から・・・。

男　婚姻届。

女1　ハハ・・・馬鹿じゃないの。

男　こいつらの息子だもん。

女1　・・・。

女1、婚姻届で紙飛行機を作ると、飛ばした。

男　墜落。

女1　着陸よ。

男　・・・元気で。

女1　ありがと・・・元気で。

男　ああ。

女1　・・・。

女1、帰る。

男　・・・。

男、落ちた紙飛行機にカメラを構える。

男　構成、監督、編集、音楽、鈴木卓也・・・主演、鈴木卓二郎・・・墜落した男が墜落した男に迫る狂気と真実のドラマ・・・タイトルは「墜落男っ！」

と、父達が立ち上がる。

男　・・・。

男、父達にゆっくりカメラを向ける。

男 「至極ありふれた波瀾万丈を生き抜いた墜落男」っ！

父6 行きます、そろそろ時間が来たようなので。

男 「一人の男に奇跡と宿命を背負わせた墜落男」っ！

父1 母さん、どこにおるのかな。

父2 とつくに先に行って待ってるよ。

男 「わめき散らす蟬のごとく傍若無人なその生き様」っ！

父5 あんた、羨ましいよ、一番いい時だもんな。

男 「そして今、まさに天高く飛翔していくその勇姿」っ！

父4 おい、早くいこうぜ。

男 「半世紀を共にした、偶然たまたま出会った女の元へ」っ！

父3 じゃあな、卓也。

父達、玄関から去っていく。

男 「己の人生、八十二年分の『ぬけがら』を脱ぎ捨て……いざ、ゆかん……」

男、カメラを外すと祭壇の前へ……。

男 ……いざ、さらば。

男、お鈴を鳴らす。

男 ……。

男、女1が飛ばした紙飛行機を拾い上げ、蛍光灯の紐にヘアピンでとめる……紙飛行機を揺らす。

男 ……これからだ……夏は終わった。

男、ベランダに出ると紅い空を見上げる。

部屋の中にヘアピンに引っ掛かった雷電がユラユラと飛び続けている。

完